

西安寺跡第5次・第6次
発掘調査報告書

2018.3

王寺町教育委員会

西安寺跡第5次・第6次
発掘調査報告書

序

このたび、王寺町文化財調査報告書第13集を刊行することとなりました。

本書では、2016年度に文化庁の国庫補助事業として実施した西安寺跡第5次・第6次発掘調査の成果を報告しています。

西安寺跡は昭和初期から知られている古代寺院遺跡で、その創建は飛鳥時代に遡ると考えられています。これまでの発掘調査では塔跡と金堂跡と推定される建物跡を確認しており、本町にとって貴重な歴史遺産であることがわかってきています。

そこで王寺町では、西安寺跡を後世に継承したいと考え、2016年度に学識経験者、地元住民からなる西安寺跡史跡整備活用委員会を設置いたしました。今後も西安寺跡の調査を継続し、住民に親しまれる遺跡として保存・活用していきたいと考えています。

最後になりましたが、調査の実施にご協力くださいました土地所有者様はじめ、文化庁、奈良県教育委員会文化財保存課など、関係各所の皆様に御礼申上げます。

2018年3月

王寺町教育委員会

教育長 梅野 滉雄

例　　言

1. 本書は、2016 年度に国庫補助事業として実施した西安寺跡第 5 次発掘調査・第 6 次発掘調査について報告したものである。西安寺跡は『奈良県遺跡地図』（奈良県教育委員会、2010 年改訂版）10 B - 0001 として登載されている。

2. 調査は王寺町教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体 王寺町教育委員会 教育長 梅野満雄
教育次長 乾清（～2017.3.） 同 中井一喜（2017.4.～）
生涯学習課長 西本貴至
文化財係長 岡島永昌（2017.7.～地域整備部地域交流課文化資源活用係長）
同主事 田中宏幸（～2017.3.）
同主査 木下さおり（2017.4.～6.）
(2017.7.～地域整備部地域交流課文化資源活用係主査)

調査担当者 同臨時職員 櫻井恵（2017.7.～生涯学習課社会教育係臨時職員）
福井彩乃（2017.7.～生涯学習課社会教育係臨時職員）

補助員 井田葵 松森多恵（調査時：奈良大学）

発掘作業 株式会社アイディエイ（西安寺跡第 5 次発掘調査）
有限会社ワーク（西安寺跡第 6 次発掘調査）

測量 株式会社アクセス

調査協力・助言 舟戸神社、文化庁、奈良県教育委員会事務局、奈良県立橿原考古学研究所、
清水昭博、竹田政弘、中川伸二、吉川孝文
西安寺跡史跡整備活用委員会（2017.2.17 設置）
菅谷文則、大脇潔、山岸常人、東野治之、仲隆裕、入倉徳裕（～2017.3.）、
岡林孝作（2017.4～）、中川忠儀

3. 本書で使用している座標数値は世界測地系、水準値は T.P. 値（東京湾平均海面値）に基づくものである。

4. 土層の色、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖 23 版』に拠った。

5. 図 2 は国土地理院発行の 1/50,000 地形図大阪東南部（昭和 59 年 7 月 30 日発行）および『奈良県遺跡地図』（2010 年改訂版）、図 3 は王寺町下水道台帳の地形図（1/500）をもとに作成した。

6. 出土遺物をはじめ調査にかかる記録はすべて王寺町教育委員会において保管している。

7. 本書の執筆編集は櫻井恵が行った。

本文目次

| | |
|-----------------|----|
| 第1章 はじめに | 1 |
| 第2章 西安寺跡第5次発掘調査 | 4 |
| 第3章 西安寺跡第6次発掘調査 | 10 |

挿図目次

| | |
|----------------------------|-------------------------------------|
| 図1 王寺町の位置 | 図8 1トレンチ遺構面1検出遺構平面図・ 土層断面図(1/50) |
| 第1章 はじめに | 図9 1トレンチ遺構面2・3検出遺構平面図 (1/50) |
| 図2 周辺の遺跡(1/50000) | 図10 1トレンチ出土遺物実測図1(1/4) |
| 第2章 西安寺跡第5次発掘調査 | 図11 1トレンチ出土遺物実測図2(1/6・1/4) |
| 図3 調査位置図(1/1000) | 図12 2・3トレンチ 検出遺構平面図・土層断面図(1/50) |
| 図4 遺構面1検出遺構平面図・土層断面図(1/50) | 図13 2トレンチSK01 出土遺物実測図(1/4・1/6) |
| 図5 遺構面2検出遺構平面図(1/50) | |
| 図6 出土遺物実測図(1/4) | |
| 第3章 西安寺跡第6次発掘調査 | |
| 図7 石田氏の伽藍想定と調査地 | |

写真目次

| | |
|--------------------------------------|---------------------------------|
| 写真図版1 西安寺跡第5次発掘調査 調査前(南東から) | 写真図版4 西安寺跡第5次発掘調査 出土遺物 |
| 遺構面1 検出遺構(北東から) | 写真図版5 西安寺跡第6次発掘調査 調査前(北から) |
| 遺構面1 SX01 遺物出土状況(南西から) | 1トレンチ 調査前(西から) |
| 写真図版2 西安寺跡第5次発掘調査 遺構面2 検出遺構(南東から) | 1トレンチ 遺構面1 検出遺構(東から) |
| 遺構面2 柱穴1(南から) | 写真図版6 西安寺跡第6次発掘調査 1トレンチ 遺構面1 |
| 遺構面2 柱穴2(南から) | SX01石列検出状況(東から) |
| 写真図版3 西安寺跡第5次発掘調査 遺構面2 検出遺構(南から) | 1トレンチ 遺構面2 検出遺構(南東から) |
| 東壁土層断面(南西から) | 1トレンチ 遺構面3 検出遺構(東から) |
| 調査状況(北西から) | |

写真図版7 西安寺跡第6次発掘調査

- 1 レンチ 東壁土層断面（北西から）
- 1 レンチ 遺構面3 SD04（東から）
- 2・3 レンチ 調査前（西から）
- 2 レンチ 検出遺構（北西から）

写真図版8 西安寺跡第6次発掘調査

- 2・3 レンチ 地山上検出遺構（東から）
- 3 レンチ 土層断面（西から）
- 2 レンチ SK01（北東から）
- 3 レンチ SK03（東から）

写真図版9 西安寺跡第6次発掘調査

- 出土遺物1

写真図版10 西安寺跡第6次発掘調査

- 出土遺物2



図1 王寺町の位置

第1章 はじめに

1 位置と環境

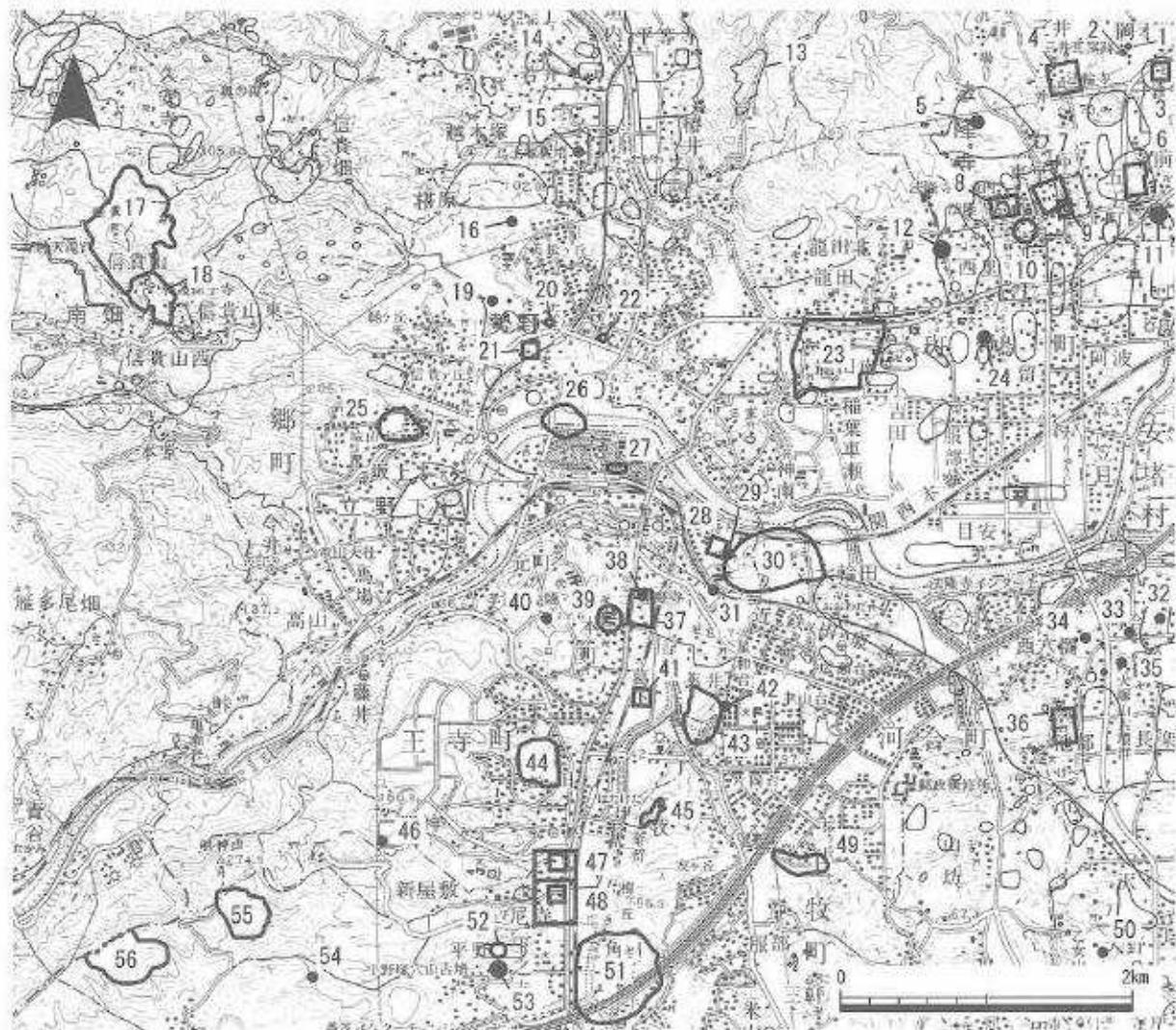
西安寺跡が所在する王寺町は、奈良県の北西部に位置し、町の北端には、奈良盆地を流れる河川の水を集める大和川が蛇行しながら西流する。王寺町の北側には大和川をはさんで三郷町、斑鳩町があり、東に河合町、東南に上牧町、南に香芝市が接している。また、大和川が亀の瀬とよばれる峡谷をぬけ大阪平野へと流れ出ていく先には大阪府柏原市があり、亀の瀬が奈良県と大阪府の府県境となっている。

王寺町の地形は、河合町から延びる馬見丘陵の先端にあたる大阪層群からなる東部丘陵、大和川と町域を南北へ流れる葛下川の沖積層が堆積する東部低地、二上山火山群の北への延長である西部高地、東部低地と西部高地との漸移地帯で、大阪層群からなる西部丘陵にわけられる。西安寺跡は、王寺町の北東部、東部丘陵にあたる標高約80mの通称舟戸山の西麓、舟戸山から延びる谷筋がひろがる傾斜地に所在する。

西安寺跡は飛鳥時代に建立されたとされる寺院遺跡で、舟戸神社を中心とした東西約110m、南北約120mの範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地としている。舟戸神社は舟戸地区の氏神として地元の人々の信仰を集める社である。神社の創立については不詳であるが、境内にある手水鉢には、嘉永元年（1848）、灯籠には嘉永3年（1850）の銘があることから、江戸時代後期の信仰を伺うことができ、天児屋根命と久那戸大神を祀る。久那戸神は岐神、道祖神、賽の神と同じく道路や旅人などを守る神である。舟戸地区は、近世の王寺村の集落の一つで「船渡組」と表記されることがあり、当麻街道において大和川を渡る「渡し船」と関連する。流通の要衝にあったこの地を守護するために勧請されたのである。この舟戸神社の境内が西安寺の中心伽藍とみられる。現在、舟戸神社の東側は傾斜地を利用した田畠が広がり、隣接地は水田が営まれている。西側は畠地、住宅が広がるが、昭和40年代に住宅開発されるまでは水田であった。南側は丘陵がせまっている。神社鳥居の北60mには江戸時代に造成された舟戸新池があり、北方約250mには大和川が流れている。神社の境内は周囲の田畠に比べると1～2m程度高く、最高所で標高は約45.5mである。

西安寺跡（28）の周辺で注目する遺跡としては、舟戸・西岡遺跡（30）があげられる。通称舟戸山の標高70m以上が遺物散布地となっており、これまでに弥生時代後期の住居址と古代の掘立柱建物が検出されている。山の北端は大和川に面して急斜面を形成しており、大和川を眼下に望む位置に営まれた遺跡で大和川との関連が注目される。西安寺跡の東方には、西安寺に所用された瓦を焼いたといわれる西安寺瓦窯（29）がある。西安寺跡のある谷筋の北側にあたり、すでに住宅地となっているため、瓦窯の遺構は確認することはできず、詳細は不明である。窯跡の南には「瓦谷池」（通称：かわんだいけ）があり、池の護岸工事を行った際には、瓦の出土をみたとの話が残っており、窯跡周辺で実施した工事立会では瓦の出土を確認している。

西安寺が創建されたと考えられる飛鳥時代には、大和川、葛下川の流域において古代寺院が多く造営される。大和川北岸の斑鳩町には7世紀初頭に創建された法隆寺若草伽藍（10）、7世紀前半に創建された法起寺（3）、法輪寺（4）、中宮寺跡（6）、7世紀半ばから後半に創建された法隆寺西院伽藍（8）、三郷町勢野には7世紀前半に創建された平隆寺跡（21）、河合町穴闇には長林寺跡（36）。西安寺跡の南西、王寺町本町には片岡王寺跡（39）、王寺町の南に隣接する香芝市尼寺には7世紀半ばから後半に創建されたと考えられる尼寺北庵寺（47）、尼寺南庵寺（48）などがある。古来より、大和川は奈良盆地と河内平野を結ぶ経路であり、聖徳太子が朝鮮半島からもたらされる先進文化の受け入れ口としてこの地域をおさえることを重要視したのである。これらの寺院が建立されたのは、推古天皇9年（601）聖徳太子の斑鳩宮の造営が行われたことによる。斑鳩文化圏からつながる道に沿ってこの周辺の古代寺院が建立されたと考えられる。西安寺跡の西方には、斑鳩と當麻方面を結ぶ街道が通っている。中近世には、当麻道とよばれる法隆寺から達磨寺を通り当麻寺へと至る道である。この道は、推古天皇30年（622）に斑鳩で亡くなった聖徳太子の御遺体を大阪府太子町にある磯長墓まで運んだ道とも重ねて、「聖



1. 瓦塚 1号墳 2. 三井瓦窯跡 3. 法起寺境内 4. 法輪寺境内 5. 仏塚古墳 6. 中宮寺跡 7. 魔鳴宮跡 8. 法隆寺西院伽藍
 9. 法隆寺東院伽藍 10. 法隆寺若草伽藍 11. 駒塚古墳 12. 藤ノ木古墳 13. 榊井城跡 14. 西官古墳 15. 島土塚古墳
 16. 今泡瓦窯 17. 信貴山城跡 18. 信貴山朝護孫子寺跡 19. 辻ノ垣内瓦窯跡 20. 上ノ御所瓦窯 21. 平降寺跡 22. 勢野茶臼山古墳
 23. 龍田城跡 24. 斑鳴大塚古墳 25. 立野城跡 26. 久度遺跡 27. 久度南遺跡 28. 西安寺跡 29. 西安寺瓦窯
 30. 丹戸・西岡遺跡 31. 岩才池北古墳 32. 城山古墳 33. 丸山古墳 34. 高山塚1号墳 35. 川合大塚山古墳 36. 長林寺跡
 37. 達磨寺旧境内 38. 達磨寺古墳群 39. 片岡王寺跡 40. 馬ヶ脊城跡 41. 寺院推定地 42. 萩井瀬ノ北遺跡 43. 香滝・菜井遺跡
 44. 崑田城跡 45. 片岡城跡 46. 崑田古墳 47. 尼寺北窯寺 48. 尼寺南窯寺 49. 下牧瓦窯跡 50. 池上古墳 51. 木辻城跡
 52. 平野塚跡群 53. 平野古墳群 54. 今泉古墳 55. 送迎山城跡 56. 七郷山城跡

図2 周辺の遺跡 (1/50000)

徳太子葬送の道」として聖徳太子信仰の一つとなっている。

2 既往の研究と発掘調査

舟戸神社の境内が西安寺跡にあたることは、昭和初期に保井芳太郎氏、石田茂作氏の報告によって周知のものとなった。保井氏は、『大和上代寺院志』の中で文献にみられる西安寺（一名、久度寺）の地が、「西安寺」の字名が残る舟戸神社の境内を主要建造物の位置と考え、西安寺跡で採集した飛鳥時代から鎌倉時代の軒丸瓦・軒平瓦等を報告している。石田氏は、『飛鳥時代寺院址の研究』の中で、塔心礎と思われる径1間以上の礎石面の中

央に径2尺余の円形穴を穿ったものが狛犬の東方3間位にあったことを地元の好事家である正光寺住職から聞き取り、拝殿の北東を塔の位置と考えた。また、拝殿の南側で礎石が破壊、散乱している所を金堂跡と推定し、拝殿の西北に東西方向に延びる帯状の高まりにも注目している。そして、舟戸神社周辺の地形と舟戸神社の西方約30mの田に「門脇」「馬場脇」の俗称が残っていることから、西面する法隆寺式伽藍配置の寺院であろうと西安寺の伽藍を復元している。

西安寺の創建を示す史料は残されていない。その寺名が初めて文献に現れるのは、『続日本後紀』の天長10年(833)条であり、そこには西安寺が大和国広瀬(瀬)郡にあり、俗号久度と記されている。仁安3年(1168)、弘安4年(1281)にも関係史料があり、貞觀3年(1347)の史料では、西安寺が興福寺一乘院の庄園であったことが伺える。そして、永正10年(1513)に西安寺北之坊興秀の名が見えるのが最後になる。しかし、この史料に記される西安寺が地名であるのか、寺名であるのか判断することは難しい。

西安寺の南西約900mには、片岡王寺跡(放光寺)という7世紀前半に創建された寺院跡がある。この放光寺については正安4年(1302)に權僧都審盛が著し、嘉吉3年(1443)に実蕃が筆写した『放光寺古今縁起』2巻が残されている。放光寺の由緒、沿革を記し、荒廃した放光寺の再興のために撰述されたもので、その中の「夕梵晨鐘二字」の項に「西安寺」の名をみることができる。また、西安寺は放光寺とともに聖徳太子建立の46箇院のひとつである。これは、訓海によって著された『太子伝玉林抄』に引かれる「私注抄」の記述によるものである。

西安寺の創建者の研究については、『新訂王寺町史』本文編(2000年)に平林章仁氏によるものがある。仁安3年(1168)の「大和国大原吉宗田地売券」には、「広瀬郡久土十条寺岡一里卅五坪西安寺」にある田地は大原吉宗の先祖が相伝してきた地と記されており、「広瀬郡久土十条寺岡一里」は現在の舟戸神社の鎮座するところである。また、王寺町久度には西安寺の別名と同じ久度神社(延喜式内社)がある。祭神のひとつである久度神は、かまどの後方の煙だし部分を神格化したカマド神で渡来系氏族が奉斎するものであり、久度一帯には渡来系氏族が居住していたとみられることから、渡来系氏族である大原史氏を西安寺の創建者としている。

西安寺跡では、これまでに4次の発掘調査が行われており、第1次発掘調査は昭和59年(1984)、樅原考古学研究所が集合住宅の建設に伴って実施した。調査区の西端で検出された南北方向の溝は、西安寺の西側の築地の溝と考えられており、ほかに中世の井戸が検出されている。

それ以降の調査は王寺町教育委員会が実施している。平成27年(2015)の包蔵地の西端で計画された住宅開発に対応した第2次発掘調査では、西安寺跡に関わる遺構、遺物は確認できなかったので、調査地は寺域から外れているものと考えられる。同年、遺跡範囲確認調査として舟戸神社境内の石田氏が塔跡、堂跡と推定する場所で第3次発掘調査を行った。塔跡とされた地点では、2基の礎石と5基の礎石抜取穴、建物基壇、基壇端に伴う石列を検出した。検出した遺構の配置から、礎石抜取穴は心礎及び四天柱の礎石の抜取穴、礎石2基は側柱の礎石と考えられ、塔基壇の遺構であることが確認できた。礎石の位置から推定される柱間は2.15m、塔身が一辺6.45mの塔を復元できる。さらに側柱の礎石から基壇端の距離が3.27mであることから、塔基壇は一辺12.99mと復元することができる。一方、堂跡と推定された地点では建物基壇などは確認できず、調査を終了した。翌平成28年(2016)、舟戸神社境内の金塔跡の北側に堂跡の存在を予想し、範囲確認調査として第4次発掘調査を実施した。礎石2基、礎石抜取穴1基、礎石据付穴1基を検出し、丁寧な版築で構築された基壇と基壇端に伴う石列を確認した。検出した遺構だけではどのような建物が建てられていたのか復元することは難しいが、西安寺を構成する主要な建物であることは間違いなく、塔跡との位置関係をみれば金堂跡の可能性が高いと考えている。

以上のように、舟戸神社の境内が西安寺跡の中心伽藍にあたることが明らかとなつたが、創建時期、伽藍配置をはじめとして明らかにする課題が多く残っている。

第2章 西安寺跡第5次発掘調査

1 調査の契機と経過

西安寺跡第5次発掘調査は、個人住宅の建設に伴って実施した。住宅の建設にあたっては、現地表面から1.45mの深さまで地盤改良が行われる。調査地は、西安寺跡第3次発掘調査で確認した塔跡から北西約60m、第1次発掘調査地から北に約20mの地点にある。直近で実施された西安寺跡第1次調査では、地表下約40cmで遺構が検出されていることから、遺構が存在する可能性は高く、遺構への影響は避けられないものと予想された。



図3 調査位置図 (1/1000)

このような中、今回の住宅建設に伴い事業地内に電柱の設置が計画され、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。そこで、今回の調査に先行させて工事立会を実施し、地表下約50cmの堆積層上面で遺構を、地表下約65cmで地山を確認した。瓦、土師器の出土も認められ、本調査地では2面の遺構面があることが確実となった。地盤改良が行われる面積は約60m²であるが、排土置場の都合もあり8.5m×6.6mのトレンチを設定し、調査面積は約56m²となった。調査期間は、平成28年6月20日から7月4日まで、実働11日である。

2 層序

調査地の基本層序は以下のとおりである。I層：黒褐色細粒砂混じりシルト（土層断面図1、以下番号のみ記載）、現在の表土で耕土である。II層：オリーブ褐色細粒砂混じりシルト（2）、III層：灰オリーブ褐色細粒砂混じりシルト（3）、IV層：灰オリーブ色細粒砂混じりシルト（4）。I～IV層までは重機による掘削を行った。II～IV層からは、須恵器、土師器、瓦器、平瓦、丸瓦が出土している。V層：全体として暗褐色の細粒砂混じりのシルト（5～10）。V層の土の色、質は一定ではなく、整地土と思われる。この層の上面で遺構を検出したので、遺構面1とする。VI層：明黄褐色粘土（11）、地山である。この層の上面でも、遺構が確認でき、遺構面2とした。

3 遺構と遺物

遺構面1　遺構面1であるV層上面では、IV層を埋土とした素掘溝を7条検出した。これらの遺構からは、平瓦・丸瓦・土師器・須恵器・瓦器が出土しており、中世以降の遺構であると考えられる。また、調査区の北半に集中して、土坑2基、溝5条、ピット2基、不明遺構2基を検出した。

SK01は長軸80cm、短軸70cm、深さ36cmの楕円形の土坑である。埋土は、上層が5Y5/1灰色粘土混じりシルト、下層が2.5Y4/3オリーブ褐色シルトで、平瓦、土師器が出土した。

SK02はSD01によって遺構上部が失われており、残存する部分で長軸160cm、短軸70cmの小判形の土坑である。深さ37cmで埋土は2層に分層でき、上層は10YR4/1褐色シルト混じり粘土、下層は10YR4/1褐色シルト混じり粘土に10YR5/1にぶい黄褐色シルトへ粘土がブロック状に混じる。瓦、土師器が出土した。

SD01は東西方向に延びる溝である。調査区西壁近くの最も幅の広い部分で80cm、深さ18cm、埋土は灰オリーブ色細粒砂混じりシルト（4）、西壁ではその下に褐色シルト混じり細粒砂（15）、褐色細粒砂混じり粘土（16）の堆積が確認できる。平瓦、丸瓦、土師器、須恵器、瓦器が出土している。

SD02は平面形状が逆L字の形状で検出した溝でSD01、SK02に切られている。SD01の北側で幅80cm、方向を東西方向に変えてからは幅50cm、深さは10～20cmである。瓦、土師器、瓦器、白磁が出土している。また、SD02の西側には、別の遺構が存在し、埋土である褐色粘土混じり細粒砂（17）の堆積が調査区の北壁、西壁で確認できる。

SD03は幅40cm、深さ10cmの南北方向に延びる溝状遺構である。埋土はオリーブ褐色粘土混じり細粒砂（22）で、丸瓦、須恵器が出土している。調査区北壁断面での切り合いでSX01より新しい時期のものである。

SD04はSD01、SD03に切られる溝状遺構である。幅30cm、深さ4cm、平瓦、土師器、須恵器が出土している。

SX01は調査区北東隅で検出した。北壁で70cm、東壁で250cmの幅でその埋土を確認でき、遺構は調査区の外側に広がる。埋土は北壁で暗灰黄色シルト～細粒砂（23）で遺構内では一部、長軸60cm、短軸40cm、深さ10cmの楕円形の形状で窪む部分があった。瓦、縄、須恵器、土師器、瓦器が出土している（図6-1～5）。1～3は瓦器碗である。1は口径14.7cm（復元）、器高6.2cm。見込みには斜格子状のヘラミガキがあり、外面は体部下半までヘラミガキは及ぶが隙間が大きい。高台内部には焼成後に「×」が刻まれている。2は口径15.1cm、器高6.4cm。見込みのヘラミガキは斜格子、外面のヘラミガキは体部上半に施されている。3は口径14.3cm（復元）、器高6.4cm。見込みには斜格子状とジグザグと反復するヘラミガキが混在し、外面のヘラミガキは口縁部

周縁に施されている。4は土師器皿で口径9.6cm(復元)、高さ1.9cm(復元)。色調は7.5Y7/4にぶい橙色である。5は、厚さ5.9cmの壺で、表面はナデが施され、5Y7/1灰白色である。出土した瓦器碗は大和型で川越編年第1段階B～Dにあたり、11世紀後半～12世紀初頭の遺構といえる。

SX02は調査区北壁の際で検出した遺構でSD02に切られる。埋土は灰黄褐色シルト混じり細粒砂(12)で、瓦、土師器が出土した。

整地土 V層の整地土からは、瓦、土師器、須恵器、瓦器が出土している。図6の6は土師器皿で口径16.2cm(復元)器高5.1cmあり、体部下半から底部にかけてはケズリが施されている。5Y6/8橙色から10YR8/3浅黄橙色を呈している。7は土師器甕口縁で、口径は27.4cm(復元)、色調は10YR8/3浅黄橙色である。

遺構面2 整地土(5～10)を掘削し、地山上で柱穴3基、土坑2基、不明遺構2基、ピット8基、自然流路を検出した。

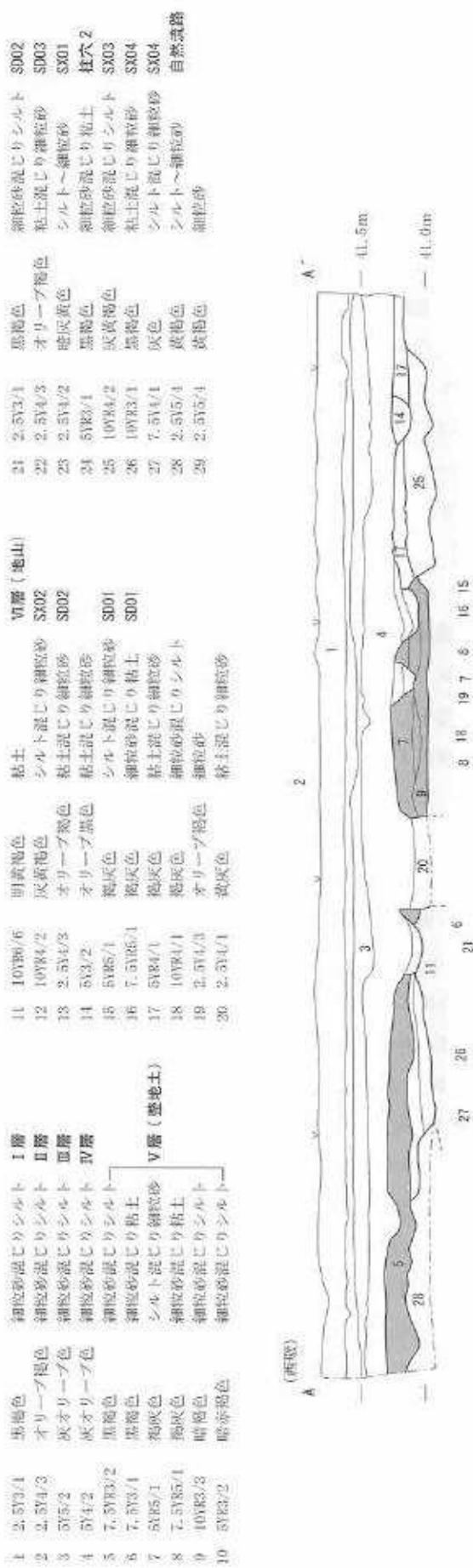
柱穴1は長軸70cm、短軸68cmの柱掘方、直径20cmの柱痕跡をもつ。柱掘方の埋土は10YR4/1褐灰色粘土が多くを占め、底の一部に7.5YR4/2灰褐色細粒砂混じりシルトが堆積する。柱痕跡には7.5YR4/1褐灰色細粒砂混じり粘土が堆積している。掘方の深さは21cmあり、柱痕跡の部分は25cmとやや深い。柱掘方から土師器が出土している。

柱穴2は調査区北壁側溝の中で柱掘方が壁にかかる状態で検出した。一边は50cm、柱痕跡は直径14cmである。柱掘方の埋土は黒褐色細粒砂混じり粘土(24)で柱痕跡の埋土は5Y4/1褐灰色細粒砂混じりシルトである。遺物の出土はなかった。

柱穴3はSX04を掘削したのちに検出した。柱掘方の一边は64cm、深さ15.5cmの方形で、柱痕跡は直径12cmを測る。遺物の出土はなかった。

SK03は長軸110cm以上、短軸100cm、深さ12.5cmの土坑である。北側の一部は遺構面1のSK02によって失われている。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色シルト混じり細粒砂で地山がブロックとなって混入しており、土師器の小片が出土しているが時期を判断できるものではない。

SK04は長軸120cm、短軸100cm、深さ15cmの小判形の土坑である。遺構の西肩は調査区西壁側溝の中で検出



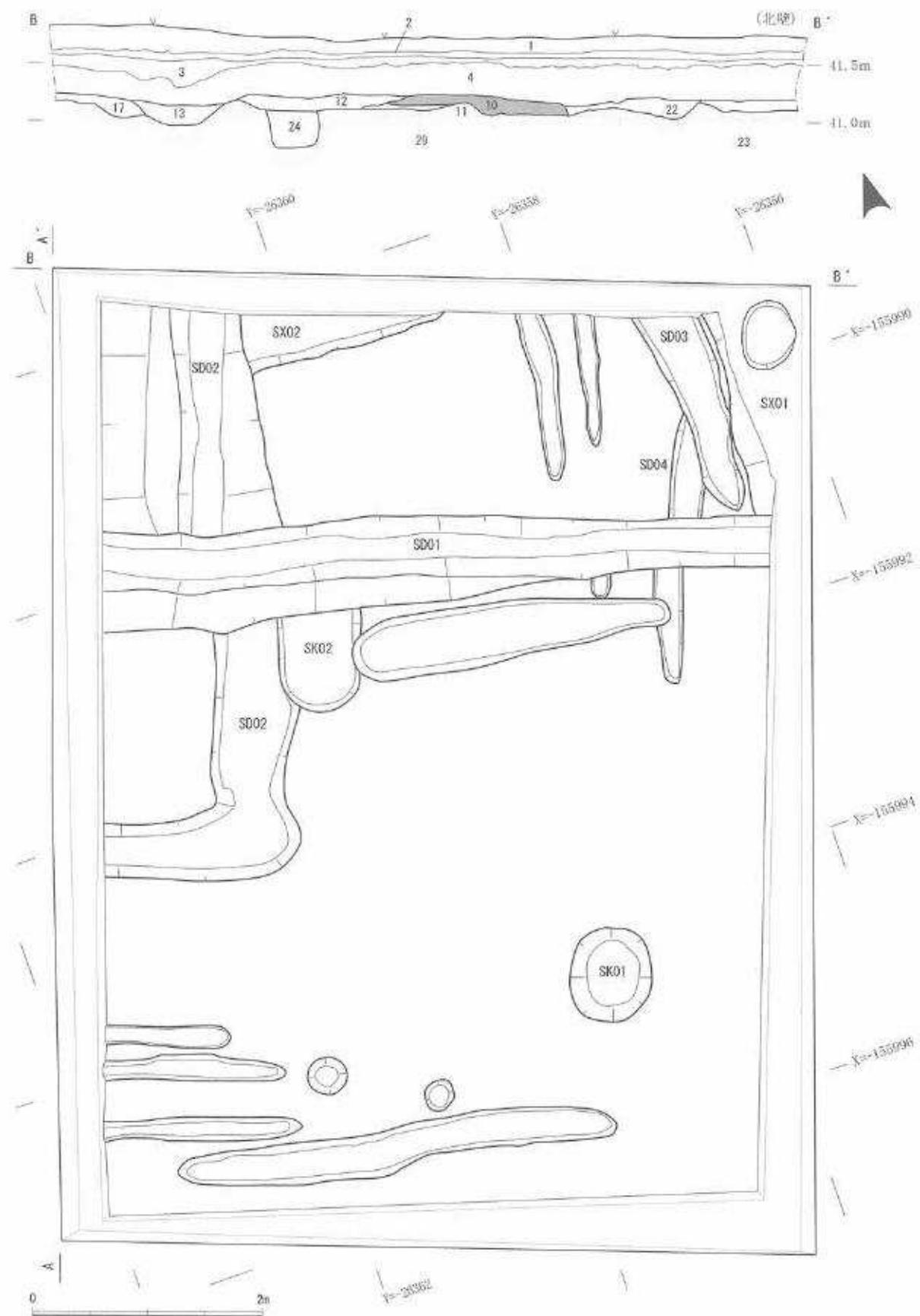


図4 遺構面1 検出遺構平面図・土層断面図 (1/50)

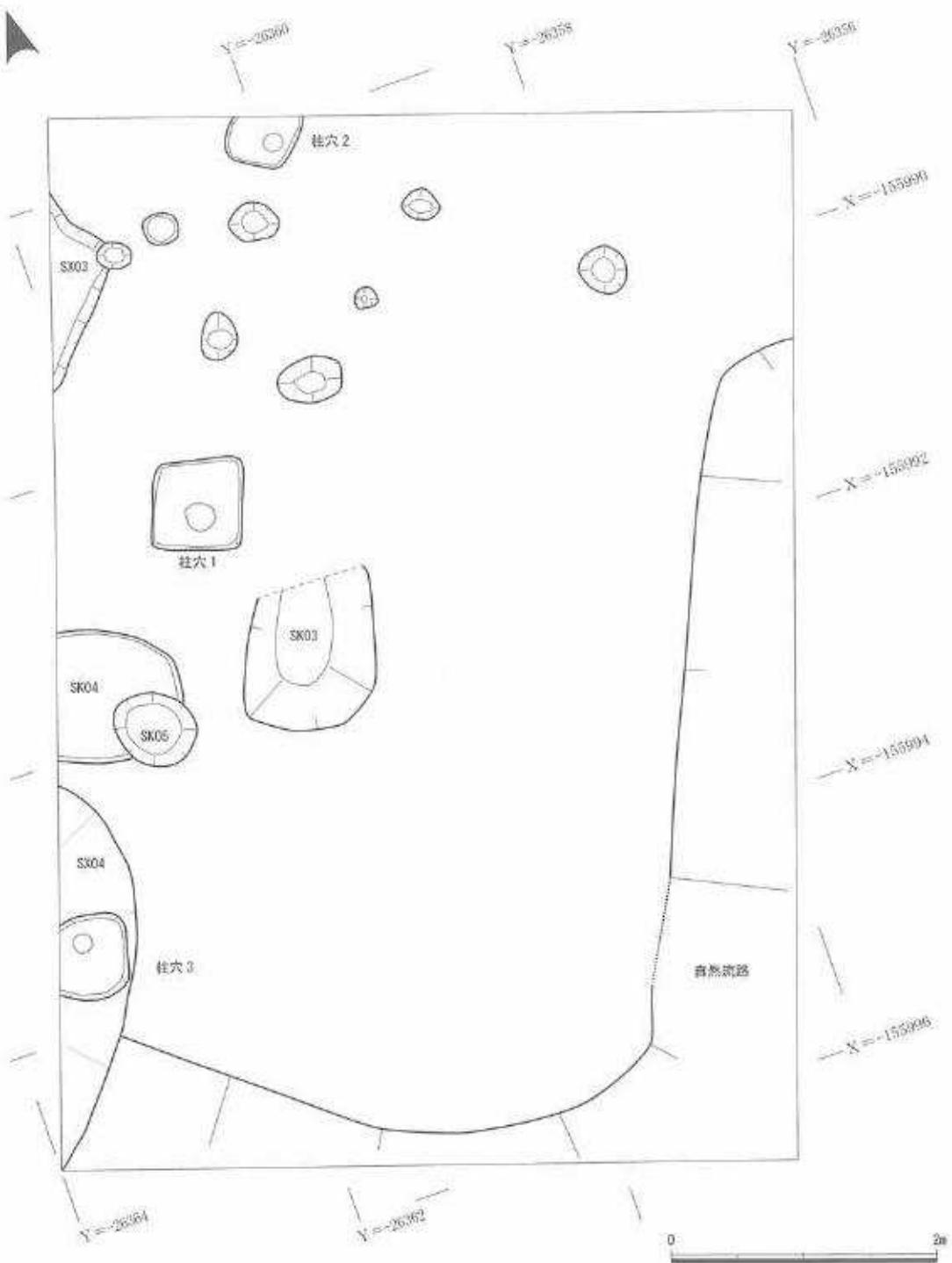


図5 遺構面2検出遺構平面図（1/50）

している。埋土は5YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルトで、平瓦、土師器、須恵器が出土した。8は土師器皿で口径12.8cm、器高3.8cmに復元できる。色調は5YR6/8橙色で口縁部にヨコナデの痕が残る。

SK05は直径55cm、深さ13.5cmの円形の土坑である。埋土は2.5Y3/1黒褐色細粒砂混じりシルトで、遺物の出土はなかった。

SX03は遺構の角部分を検出した形となっている。調査区西壁では幅が170cm、深さ24cmで灰黄褐色細粒砂混じりシルト(25)の堆積が確認できる。瓦、須恵器の壺底部、土師器の皿が出土している。

SX04は西壁際で平面が弓なりの形状で検出した遺構で、西壁では幅180cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色

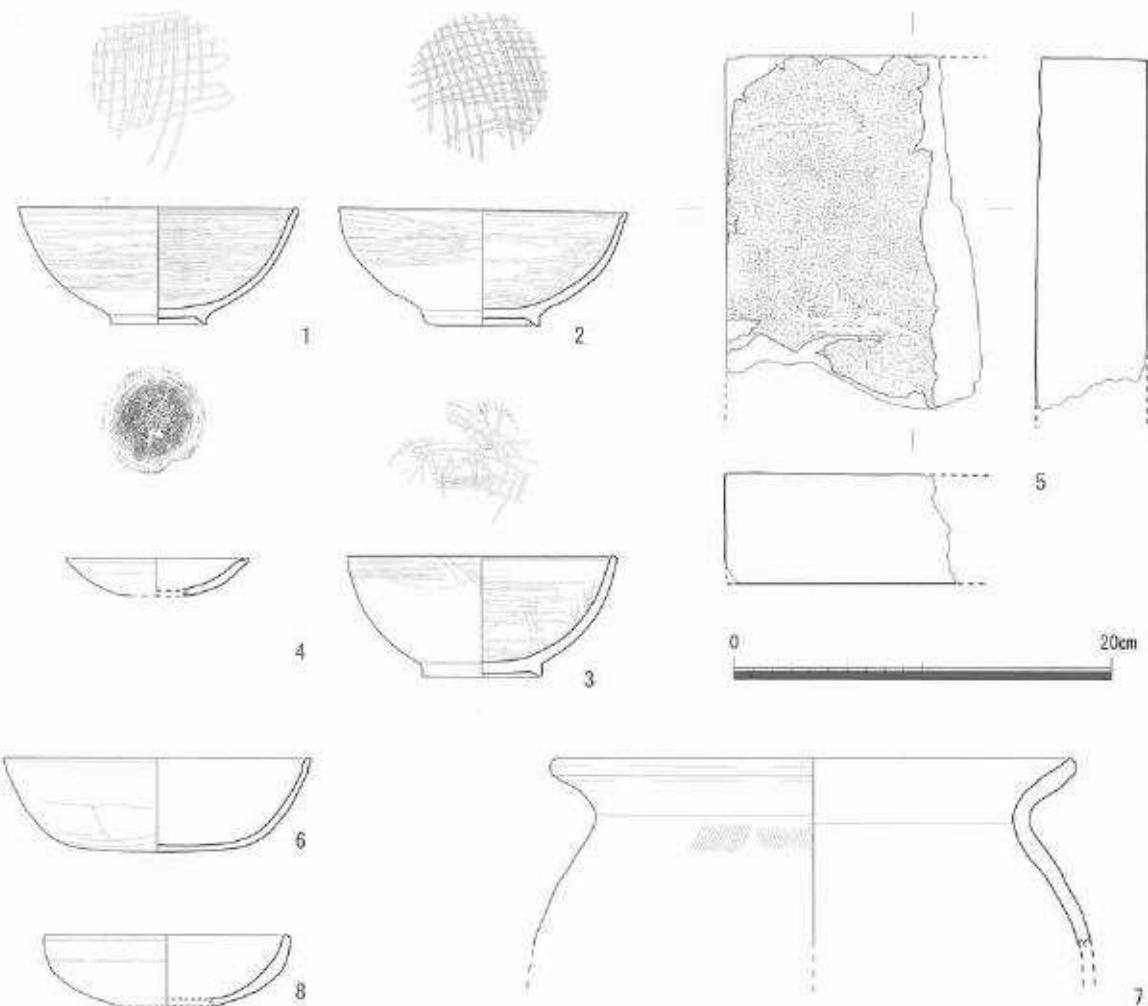


図6 出土遺物実測図 (1/4)

粘土混じり細粒砂(26)、灰色シルト混じり細粒砂(27)の2層が堆積する。古式土師器の底部、内面に暗文のある土師器の皿、須恵器の甕が出土している。

自然流路は片岸を検出した。流路は調査区の東壁、南壁に沿って屈曲しており、黄褐色シルト～細粒砂(28)の水成堆積である。遺物の出土はなかったが、SX04がこの自然流路上に形成されていることから、自然流路はSX04より古い時期のものであろう。流路の底の高さは西側が低く、西流していたものと考えられる。西安寺跡第1次発掘調査においても西安寺創建以前と考えられている自然流路が検出されている。

4 まとめ

今回の調査では、整地土上と地山上の2面で遺構を確認することができた。整地土上で検出したSX01の出土遺物により、整地土上面で検出した遺構の時期は11世紀後半以降のものと考えられる。また、整地土にも瓦器の破片が含まれることから、整地も同じ頃に行われたと考えられる。地山上では3基の柱穴を検出したが、柱穴の規模、柱穴の位置、柱掘方の方向などからこれら3基の柱穴を一つの建物と考えることは難しい。これらの柱穴が東側に展開しないことや、地山上での遺構の分布状況をみると、これらの遺構は調査区の北側、西側へと広がっていくものと考えられる。地山上で検出した遺構は、遺構からの出土遺物が少なく時期の特定は難しいが、整地土を掘削した後に瓦器の出土はなく、古代の遺構であろう。

出土した瓦器碗、土師皿などの遺物、柱穴等の遺構は、西安寺が寺院として継続していた時期と重なるものであり、今回の調査によって、西安寺周辺で活動する人々の痕跡を確認することができたといえる。

第3章 西安寺跡第6次発掘調査

1 調査の契機と経過

西安寺跡第3次発掘調査で塔跡、西安寺跡第4次発掘調査で金堂跡と考えられる建物基壇を確認したことから、王寺町では西安寺跡を史跡として、遺跡の保存・活用をすすめるために遺跡範囲確認調査を継続することとなった。第6次発掘調査は、中心伽藍の周辺の状況の確認を目的とし、2カ所で調査区を設定した。一つは石田氏が『飛鳥時代寺院址の研究』の中でも注目している舟戸神社拝殿西北にある幅5.4m、長さ18mの帯状の芝地にあたり、現況は舟戸神社への西側出入口として住民が利用する通路である。この通路には多くの瓦が地表面に散乱しており、所々で花崗岩の礫頭がみられる。3、4次発掘調査の成果から、西面する法起寺式の伽藍配置を仮定すれば、この通路が参道の痕跡とも考えられ、花崗岩は門等の遺構に関連するものとも考えられる。また、舟戸神社境内と神社西側の畠地では現況で約1.5mの比高差がある。そこで、舟戸神社西側の水路をはさんで舟戸神社手水舎西側と畠地に調査区を設定し、旧地形を確認することとした。

1トレンチは通路に設定した調査区である。当初は、東西1.5m、南北5.0mの設定であったが、遺構の確認のため拡張し、東端で南北幅5.0m、西端で南北幅3.2m、東西長5.0mとなった。下層遺構については、調査範囲を半減させる形で行い、遺構と遺構面の保存を図っている。2トレンチは畠地に設定した東西3.2m、南北1.5mの調査区である。南西隅で遺物の集中する部分があったため、東西幅1.0mで南に70cm拡張した。3トレンチは神社境内に設定し、東西1.7m、南北1.5mの調査区である。あわせて調査面積は約30m²となり、調査期間は平成29年3月6日から同25日まで、実働14日である。

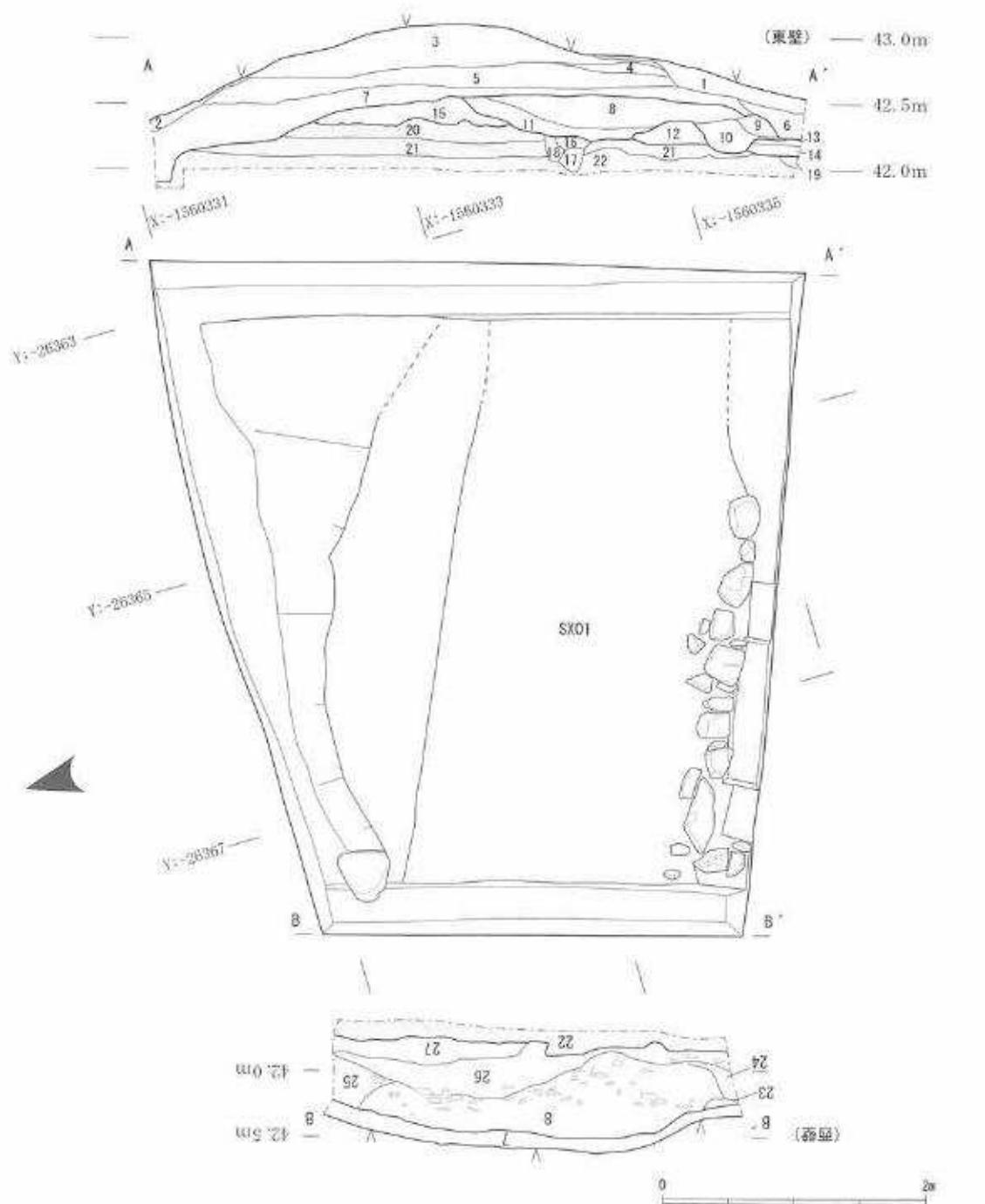
2 1トレンチ

層序 1トレンチの現況は、神社から西側にある南北方向の道路に向かう下り坂の通路となっており、中央が高くふくらむ形となっている。北側は集合住宅で、その敷地とは約1mの比高差がある。南側は畠地として利用されている。1トレンチの東西両端で土層断面を確認し、堆積の様相が大きく違うが、残りの良い東壁土層断面を基本として報告する。上層から、1～3は現地表面を覆う表土。4、5は1トレンチ横にかつて焼却炉が設置されていたこともあり、廃棄物を含む堆積層である。7はそれ以前の表土とみられオリーブ褐色微粒砂混じりシルトが堆積している。7の下層では8の瓦を大量に含む溝状の堆積層(SX01)、12～15の整地土が堆積する。SX01の影響によって、整地土層の前後関係は確認できていないが、これらの整地土上面で遺構を検出している。12の褐色細粒砂混じりシルトからは、半截花文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦が出土しており、室町期以降の整地と考えられる。15の整地土の下には20の暗褐色のシルト層が堆積し、非常に硬く締まっている。21は褐色の粘土層、22層は灰色と明黄褐色が混じる粘土層で、20～22は地山である。20、21の上面には乾裂痕が認められる。西壁土層断面については、東壁の20、21に対応する地山の堆積ではなく、22の地山直上に堆積する層まで瓦を包含している。



図7 石田氏の伽藍想定と調査地

(『飛鳥時代寺院址の研究』挿図に加筆)



| | | | | | | | | | |
|---------|------------|------------|-----------|------|----|---------|--------|-----------|-------|
| 1 | 5YR3/1 | 黒褐色 | 粗粒砂混じりシルト | 表土 | 15 | 10YR4/8 | 褐色 | 粗粒砂混じりシルト | 整地土 |
| 2 | 10YR3/2 | 黒褐色 | 粗粒砂 | | 16 | 2,5V5/6 | 黄褐色 | 粗粒砂混じり細粒砂 | |
| 3 | 2,5YR1,7/1 | 赤黒色 | シルト | 耕土 | 17 | 2,5Y4/4 | オリーブ褐色 | 粘土混じり粗粒砂 | SD004 |
| 4 | 2,5Y3/3 | オリーブ褐色 | 粗粒砂混じりシルト | | 18 | 10YR4/6 | 褐色 | 粗粒砂混じりシルト | |
| 5 | 10YR3/3 | 暗褐色 | 粗粒砂混じりシルト | 田表土 | 19 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色 | 微粒砂混じり粘土 | 地山 |
| 6 | 2,5Y3/3 | 暗オリーブ褐色 | 粗粒砂 | | 20 | 10YR3/4 | 暗褐色 | シルト | |
| 7 | 2,5Y4/6 | オリーブ褐色 | 微粒砂混じりシルト | SX01 | 21 | 10YR4/6 | 褐色 | シルト | |
| 8 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 粗粒砂混じりシルト | | 22 | 7,5V5/1 | 灰色 | 粘土 | |
| 9 | 2,5Y4/4 | オリーブ褐色 | 微粒砂 | | 23 | 5V6/8 | 明黄色 | 粘土 | |
| 10 | 7,5Y4/3 | 暗オリーブ色 | 微粒砂混じりシルト | SD03 | 24 | 10YR3/3 | 暗褐色 | シルト | |
| 11 | 10YR4/4 | 褐色 | 粗粒砂混じりシルト | SD01 | 25 | 7,5V4/4 | 褐色 | シルト | |
| 12 | 10YR4/6 | 褐色 | 粗粒砂混じりシルト | 整地土 | 26 | 7,5V3/2 | オリーブ黒色 | 粗粒砂混じりシルト | |
| 13 | 10YR5/6 | 黄褐色 | シルト | 整地土 | 27 | 10YR4/6 | 褐色 | シルト混じり粗粒砂 | |
| 14 | 10YR4/4 | 褐色 | 粗粒砂混じりシルト | | 28 | 5V5/4 | 黄褐色 | シルト混じり粗粒砂 | |
| 10YR5/6 | 黄褐色 | 地山 (22) | 整地土 | | | | | | |
| | | ブロック混じりシルト | | | | | | | |

図 8 1トレングチ遺構面1横出遺構平面図・土堀断面図 (1/50)

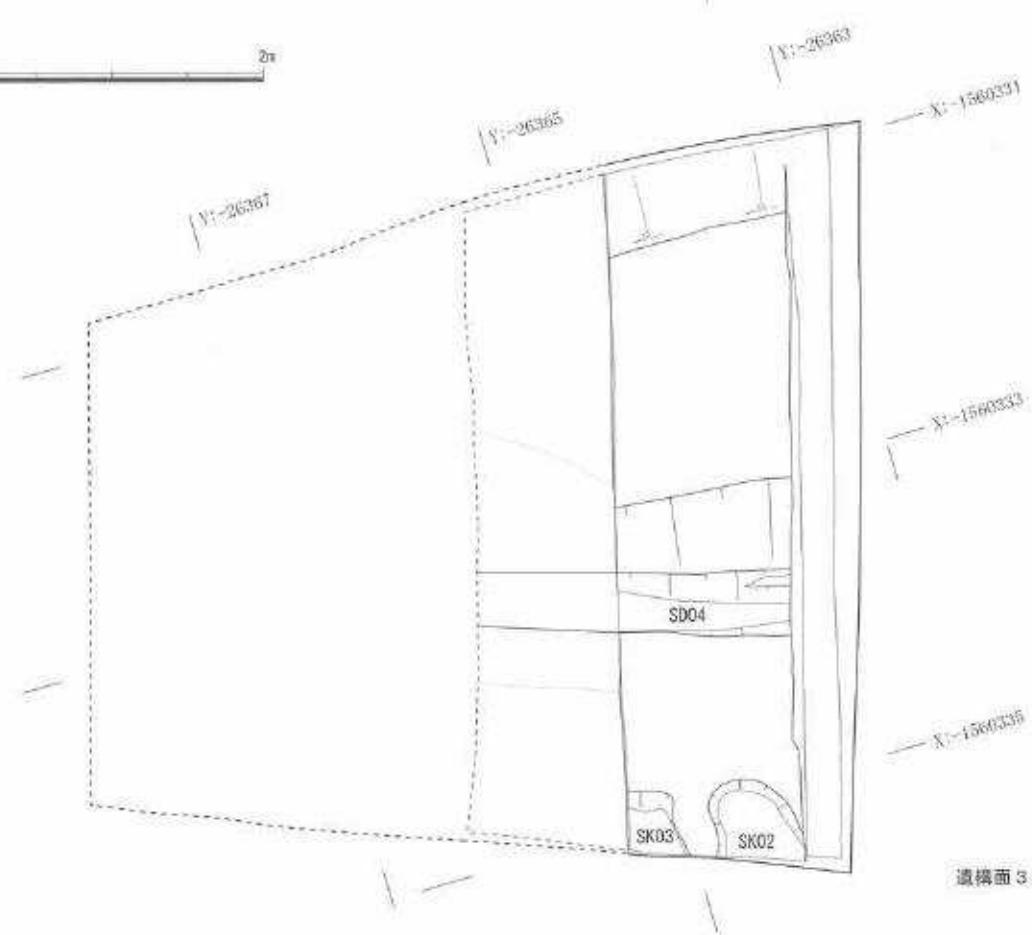
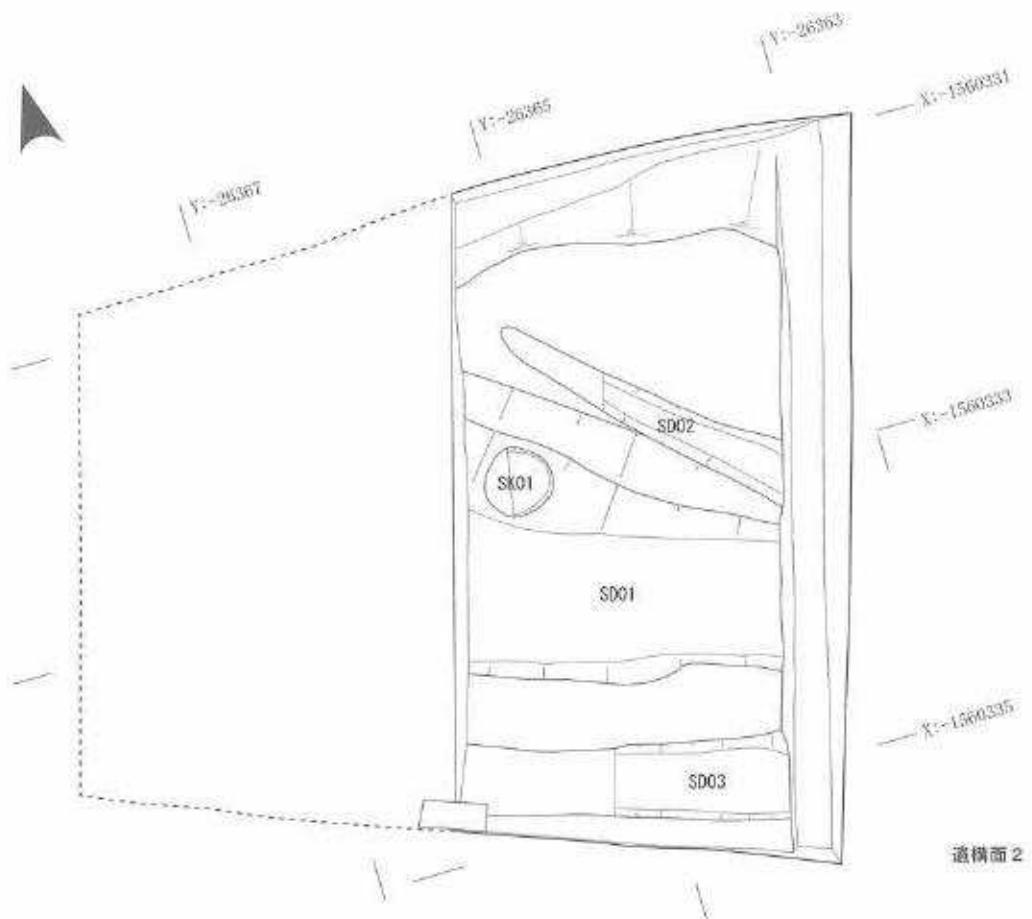


図9 1トレンチ遺構面2・3検出遺構平面図(1/50)

遺構面1 表土、廃棄物を包含する層、旧表土、耕作土を掘削した後、トレンチ南半分で現在の通路に重なるように東西方向に延びる高まりを検出した。その高まりの両寄りで最大幅2.6m、最も厚い部分では62cmの瓦を多く含む層が堆積しており、この堆積をSX01とした。遺構の南端では、こぶし～人頭大の石が並んでいる。この石列の中には調査前から地表に現れていた花崗岩がふくまれ、この東西方向に延びる石列を延長した先、現在の通路の西にも花崗岩が露頭する。SX01は、通路として造成された堆積であり、石列はその端を区画するために設置されたものと考えられる。調査地から西へ続く通路上に瓦が多く散布している状況は、通路の造成に土砂とともに瓦が使用された結果であろう。多くの瓦と共に、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器が出土し、陶磁器には、近世～近代のものが含まれることから、この通路が形成されたのは明治期以降と考えられる。SX01の掘削は、トレンチ東端から3mの範囲で行った。

遺構面2 SX01の堆積を除去し、精査を行うと、整地土(12、13、15)を遺構面として3条の溝と1基の土坑を検出した。

SD01は東西方向に延び、SX01とほぼ重なる位置で検出した。東壁で幅1.5m、西端で幅2.0m、最も深い部分で27.2cmを測る。埋土は褐色粗粒砂混じりシルト(11)、瓦と土師器が出土している。

SD02は南東～北西方向に延びる幅30cm、深さ14.7cmの溝である。瓦が出土している。

SD03は東西方向に延びる幅54.0cm、深さ16.3cmの溝である。埋土は暗オリーブ色微粒砂混じりシルト(10)で、瓦、土師器が出土している。

SK01はSD01を掘削したのちに、整地土上で検出した遺構である。直径46.0cmの円形で、深さは11.8cm、埋土は2.5Y5/4 黄褐色シルト混じり細粒砂で瓦、土師器が出土している。

SD02、03はトレンチ東端から1.5mの範囲での掘削とし、SD01は下層に遺構が存在するので、確認のために完掘し、SK01は半掘とした。

遺構面3 整地土を除去し、地山上面での精査を行った。トレンチ北半では暗褐色シルト(20)が幅1.7mの高まりとして東西方向に延びている。しかし、西壁土層断面ではこの層は確認できないので検出範囲外で削平をうけ、途切れるものと考えられる。トレンチ南半では褐色シルト(21)が遺構面となり、1条の溝と2基の土坑を検出した。

SD04は東西方向に延びる幅40.0cm、深さ24.7cmの溝で、溝の肩の立ち上がりは垂直に近い。埋土は黄褐色粗粒砂混じり細粒砂(16)、オリーブ褐色粘土混じり細粒砂(17)、褐色粗粒砂混じりシルト(18)である。この遺構はSD01の底で検出しておらず、平面、断面からも遺構面2、3のどちらに属するものかは確認できない。出土遺物は古代瓦、土師器、凝灰岩が出土しており、中世の遺物は認められないので、古代の遺構と判断する。溝底の標高は東が42.0m、西が41.9mで西へ下る。

SK02は東西幅50cm、南北長60cm以上、深さ5.3cmの土坑である。埋土は2.5Y4/6 オリーブ褐色シルトで瓦、土師器、須恵器が出土している。

SK03は調査区西南隅にかかる遺構である。埋土は2.5Y4/4 オリーブ褐色粗粒砂混じりシルトで瓦、土師器が出土している。

出土遺物 1トレンチからは、地表に散布していた遺物を含めて、コンテナ72箱の遺物が出土した。図10、11に1トレンチの出土遺物のうち図化できたものを掲載している。SX01からの出土は1、3、5～10、13～18、23～29、表土及び旧表土からの出土は2、12、21、22、整地土からの出土は19、側溝掘削による出土が4、11、20である。

1は素脊蓮華文軒丸瓦で、蓮弁は輪郭が凸線で表現され、先端がやや尖り、中央に錦が入る。色調は2.5Y6/2灰黄色で瓦当厚は1.5cmである。2～4は単脊蓮華文軒丸瓦である。2、3は素縁で、2の色調は2.5Y6/4にぶい黄色、瓦当厚2.2cm、3の色調は2.5Y7/3 浅黄色である。4は蓮弁と中房が一部残るものである。色調は2.5Y5/2

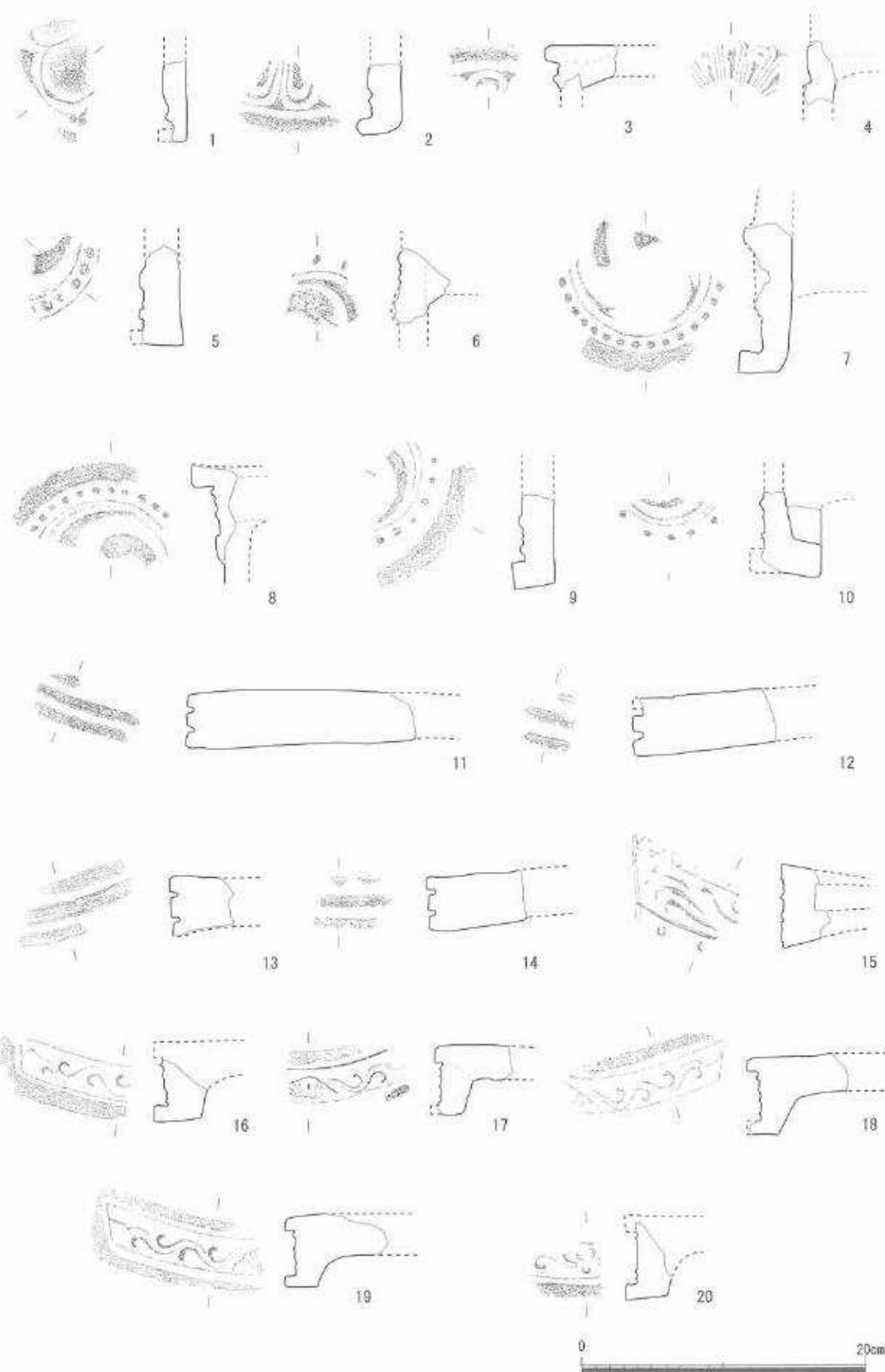


図 10-1 トレンチ出土遺物実測図 1 (1/4)

暗灰黄色、瓦当厚は2.0 cm、邊弁の長さが3.0 cmで小ぶりの軒丸瓦と考えられる。5は左巻の巴文軒丸瓦で内圈線、外圈線ともにある。瓦当厚は2.5 cmあり、色調は被熱のため2.5Y7/4 浅黄色となっている。6は左巻巴文軒丸瓦である。巴の頭を横断する范傷があり、西安寺跡でこれまでに確認している瓦范の破損したものを使用している軒丸瓦と同范品である。被熱しており、色調は10YR7/4 にぶい黄橙である。7は瓦当中心部を欠くが、右巻の三頭巴文軒丸瓦である。内圈線があり、巴の尾は内圈線につかない。巴文の頭の断面形は扁平な台形である。色調は2.5Y7/1 灰白色。8は右巻きの巴文軒丸瓦で瓦当裏面は丸瓦との接合面で剥離している。内圈線があり、巴文の頭の断面形は扁平である。色調は被熱のため10YR6/6 明黄褐色となっている。9は右巻の巴文軒丸瓦で内圈線があり、巴の尾は内圈線につかない。瓦当厚は2.2 cm、瓦当側面厚は2.9 cm、色調は2.5Y4/1 黄灰色である。10は隅用の軒丸瓦で瓦当には、右巻の巴文、内圈線、その周囲には小さい珠文が配される。瓦当径は13.4 cmに復元でき、瓦当厚は1.6 cmで、瓦当上半を欠く。瓦当裏面下端には幅2.3 cm、厚さ2.0 cmの凸帯がある。色調は5Y5/1 灰色である。

11～14は三重弧文軒平瓦である。11は瓦当厚3.0 cm、3本の弧線の幅は上1.0 cm、中0.85 cm、下1.1 cmとやや中段が狭くなっている。凸面はナデで器面調整されており、凹面には、糸切痕と布目の圧痕が残り、粗いナデが施される。色調は5B5/1 青灰色である。12は瓦当厚4.0 cm、各弧線とも幅1.0 cmを測る。凸面は丁寧なナデ、凹面は布目痕と瓦當に沿って幅2.5 cmの型引きの施文具の痕跡がある。色調は2.5Y5/1 灰色である。13は瓦当厚4.4 cm（復元）、弧線の幅は上1.2 cm、中1.4 cm、下1.0 cm（残存）と中段がやや広くなっている。平瓦部は両面は欠損、または磨滅しており調整は不明である。色調は2.5Y7/2 灰黄色で被熱により10YR6/4 にぶい黄橙色となっている部分がある。14は瓦当厚3.8 cm、弧線の幅は各段とも1.0 cm前後とほぼ等しい。凸面は丁寧なナデ、凹面には布目圧痕が残り、12と同様、瓦當に沿って幅2.5 cmの施文具の痕跡が残る。色調は5Y4/1 灰色である。15は唐草文軒平瓦である。この軒平瓦は脇区がなく、上外区は鋸歯文、下外区には綫長の長円珠文がある。瓦当厚は6.6 cm、上外区の幅は1.0 cm、下外区の幅は1.5 cmあり、頸の形状は曲線頸である。瓦当裏面は平瓦との接合面で剥離しており、瓦当裏には厚さ2.3 cmの平瓦の痕跡が残っている。瓦当の接合に包み込み技法が用いられている。色調は7.5YR4/1 暗灰色。西安寺跡で初めて確認したものである。16は均整唐草文軒平瓦で、瓦当下半分で剥離した頸部分が残る。頸幅は3.3 cm、頸、頸裏面はナデで仕上げられている。色調は2.5Y7/1 灰白色である。17～19は半薇花文を中心飾りとした均整唐草文軒平瓦である。頸の形状は段頸で、17は幅0.7 cmの面取りが施され、18、19には面取りはない。色調は17が2.5Y7/1 灰白色、18が10YR6/6 明黄褐色、19が2.5Y7/2 灰黄色である。20は上向きの4葉などが中心飾りの均整唐草文軒平瓦である。瓦当の下半が接合部で剥離して残存するものである。頸、頸裏面はナデによって仕上げられており、色調は被熱により10YR6/6 明黄褐色である。

21は行基丸瓦である。狭端幅12.2 cm、胴部幅15.5 cm、胴部高7.3 cmある。凸面はヨコ方向のナデで器面を調整し、凹面には糸切痕、布目痕、横方向に粘土を接合した痕跡が認められる。布目には、細目、粗目の痕があり、複数の布が使用されている。22は表面が残る部分が少ないが、破片の形状から鬼瓦の裾部と思われる。色調は5Y7/2 灰白色である。23、24は博。23は厚さ5.6 cm、色調10YR7/1 灰白色、24は厚さ5.8 cm、色調7.5YR6/6 橙色である。

25は須恵器杯身である。口径12.7 cm（復元）、器高3.7 cm、色調5Y7/2 灰白色である。26、27は、土師器土条の口縁部分である。26は口縁上端を内側に折り曲げる大和H2型であり、直径は23.2 cmに復原できる。27は口縁が内傾してたちあがり、外面にはなでによって稜線が形成される。内面には横方向のハケ目の痕跡が残る。口径は32.4 cmに復元でき、色調は5Y4/1 灰色、鋤より上は黒色に変色している。

28、29は瓦質土器の鉢の口縁部周辺の破片で、凸帯間はスタンプ文により加飾されている。器面の磨滅が著しい。

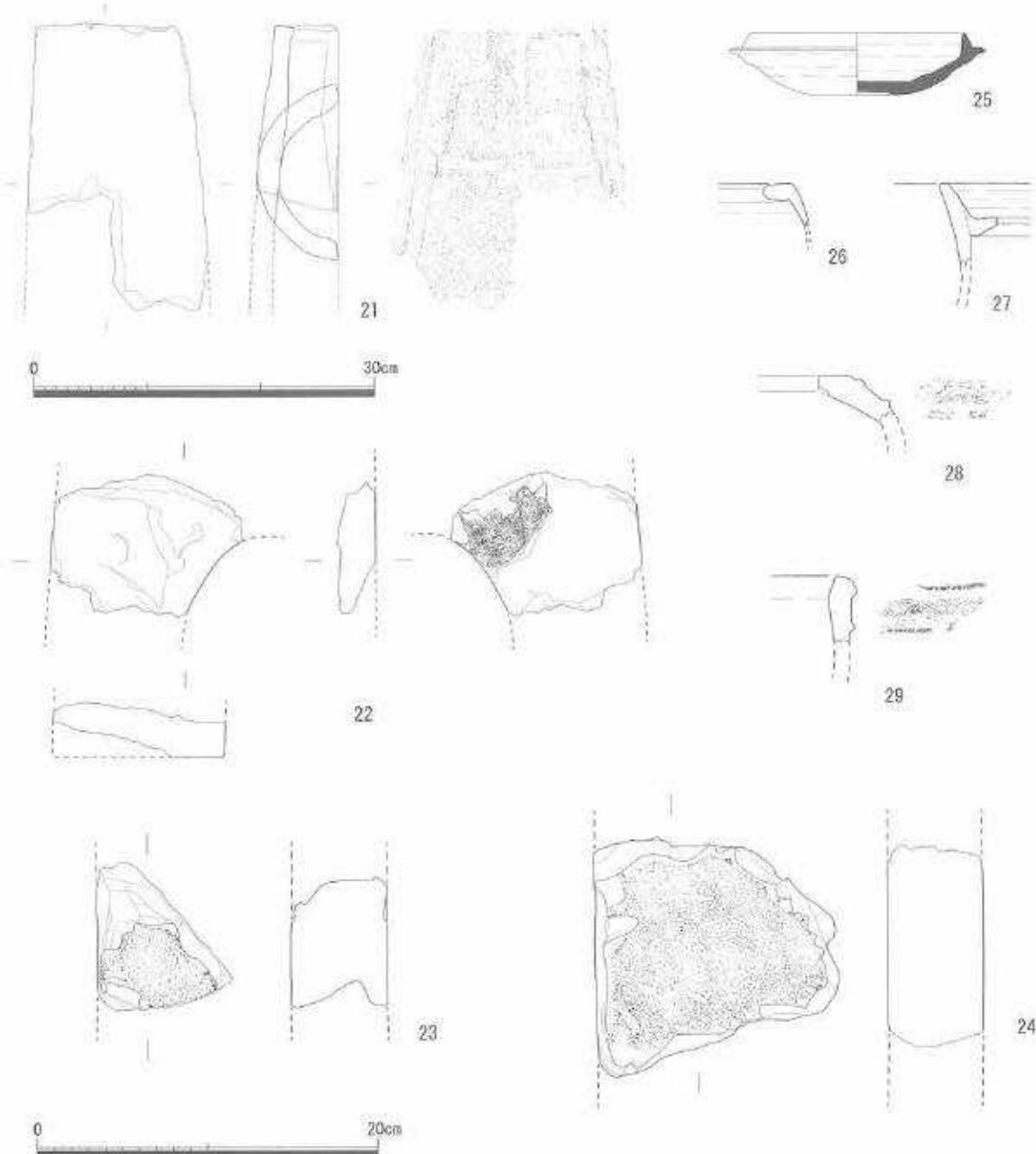


図 11 1トレンチ出土遺物実測図 2 (1/6・1/4)

3 2・3トレンチ

層序 2トレンチは休耕地となっており、3トレンチは神社境内西端の斜面部分にあたる。この2つのトレンチは連続させたものと考え、まとめて報告する。1は神社境内の表土である。2、3は排水管等の設置に關わる現代の整地土、4、5は耕土、10、14は旧耕土、6～9は水路のU字溝設置工事の掘方埋土である。17は黄褐色シルト～細粒砂の水成層であり、U字溝設置以前の水路の氾濫の痕跡であろう。21は暗褐色シルトでよく締まっており、この上面から乾裂痕が認められる。この上面で遺構を確認した。22は黄褐色細粒砂混じりシルト、23は灰白色と明黄褐色が混じる粘土で、21～23からの遺物の出土はなく地山である。2トレンチでは、21、22は存在しないが、23の地山上で遺構を検出した。

2トレンチ 地山上で旧水路、3条の素掘溝、2基の土坑を検出した。また、トレンチの東端にある水路は、U字溝が設置される以前から水路として機能しており、その西肩を検出した。現在と同じく南北方向に延び、水

| | | | | | | | | | |
|----|----------|--------|-----------|-----|---------|---------|--------|-----------|------|
| 1 | 2.5Y4/2 | 暗灰色 | 細粒砂混じりシルト | 表土 | 13 | 2.5Y5/4 | 黄褐色 | 粗粒砂混じりシルト | 整地土 |
| 2 | 2.5Y7/6 | 明黄褐色 | シルト | | 14 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色 | シルト混じり粗粒砂 | 旧耕土 |
| 3 | 2.5Y5/3 | 黄褐色 | シルト | 整地土 | 15 | 5Y4/3 | 暗オリーブ色 | 粗粒砂混じり粘土 | 素掘溝 |
| 4 | 2.5Y4/2 | 暗灰色 | シルト混じり粗粒砂 | 整地土 | 16 | 5Y5/2 | 灰オリーブ色 | 粗粒砂混じり粘土 | 素掘溝 |
| 5 | 7.5YR3/1 | 黒褐色 | シルト | 粘土 | 17 | 2.5Y5/4 | 黄褐色 | シルト～細粒砂 | 水成層 |
| 6 | 5Y3/1 | 暗オリーブ色 | 粗粒砂混じりシルト | 粘土 | 18 | 2.5Y5/3 | 黄褐色 | 粗粒砂混じり粘土 | SK01 |
| 7 | 2.5Y4/4 | オリーブ褐色 | 粗粒砂混じりシルト | 擾乱 | 19 | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色 | シルト混じり粗粒砂 | SK01 |
| 8 | 2.5Y4/6 | オリーブ褐色 | シルト | | 20 | 5Y4/2 | 灰オリーブ色 | 粘土 | SK01 |
| 9 | 7.5YR4/1 | 灰色 | 粗粒砂混じりシルト | | 21 | 10YR3/3 | 暗褐色 | シルト | |
| 10 | 5Y4/2 | 灰オリーブ色 | 粗粒砂混じりシルト | 旧耕土 | 22 | 2.5Y5/6 | 黄褐色 | 粗粒砂混じりシルト | |
| 11 | 5Y3/2 | オリーブ黒色 | シルト | 整地土 | 23 | 2.5Y7/1 | 灰白色 | | 地山 |
| 12 | 10YR5/8 | 黄褐色 | 粗粒砂混じりシルト | 整地土 | 10YR6/6 | 明黄褐色 | 粘土 | | |
| | | | | | 2.5Y0/6 | 明黄褐色 | 粘土 | | |

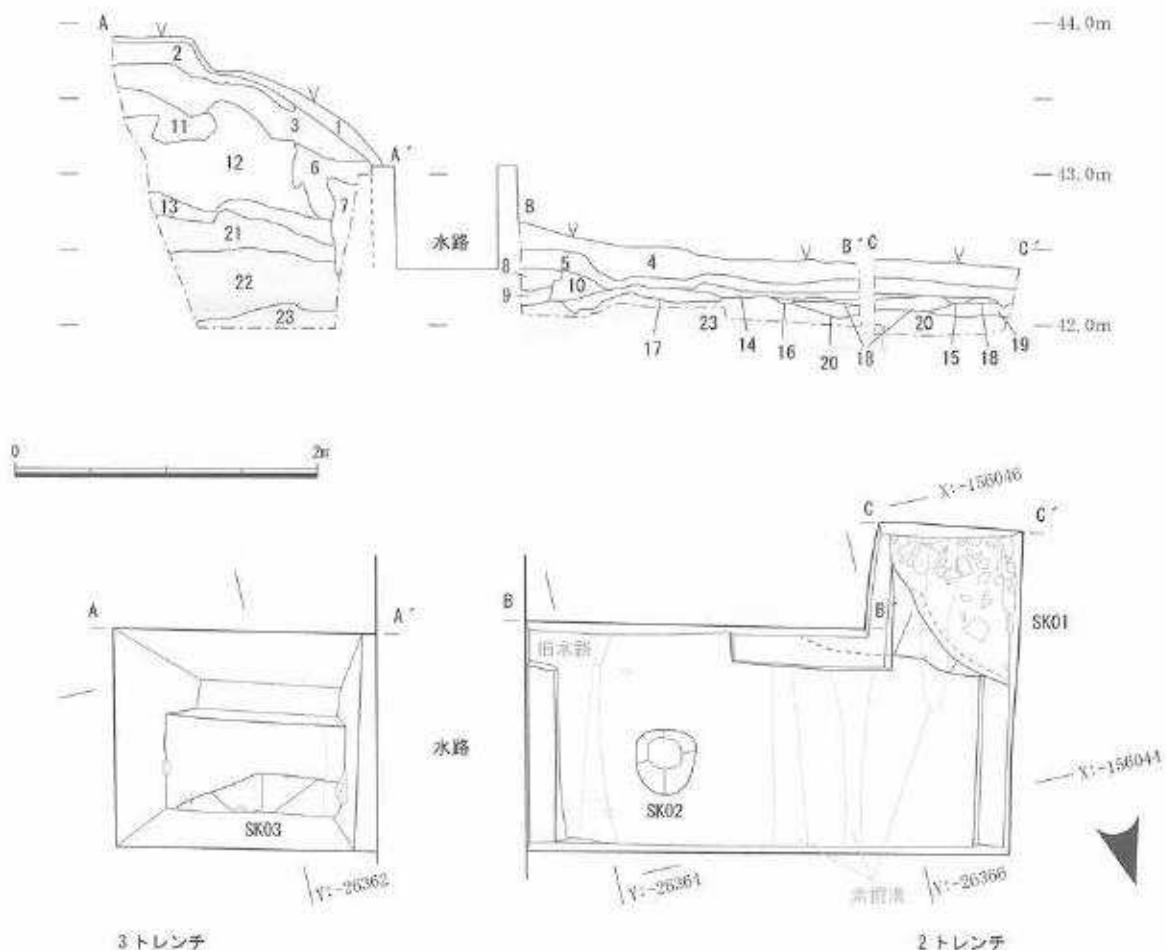


図 12 2・3 トレンチ検出遺構平面図・土層断面図 (1/50)

路の岸に沿った木杭も残っている。南北方向に延びる3本の素掘溝は耕作痕跡で、幅約20cm、深さ2~4cmである。

SK01は、トレンチ南西隅にかかる状態で検出した。遺構の主要部分はトレンチ外にあるので、その規模は不明である。土坑の肩は緩やかな傾斜から垂直に落ちる形状で、埋土の上層は砂気が多く、下層は粘土で、瓦、土師器、瓦質土器の擂鉢、石等が出土している。湧水があり井戸と考えられる。深さ25cmまで掘削を行った。

3 トレンチ 神社境内の地表面の標高は43.9m、地山は42.7mで検出している。表土を除けば約1mの整地土(11~13)が堆積しており、その整地土からは瓦、土師器、須恵器、瓦器が出土した。中世以降の整地と考えられる。

SK03は21の暗褐色シルトの地山上面で北壁にかかる状態で検出した。深さは59.0cm、埋土には地山がブロック状に混在する。丸瓦、平瓦が出土している。

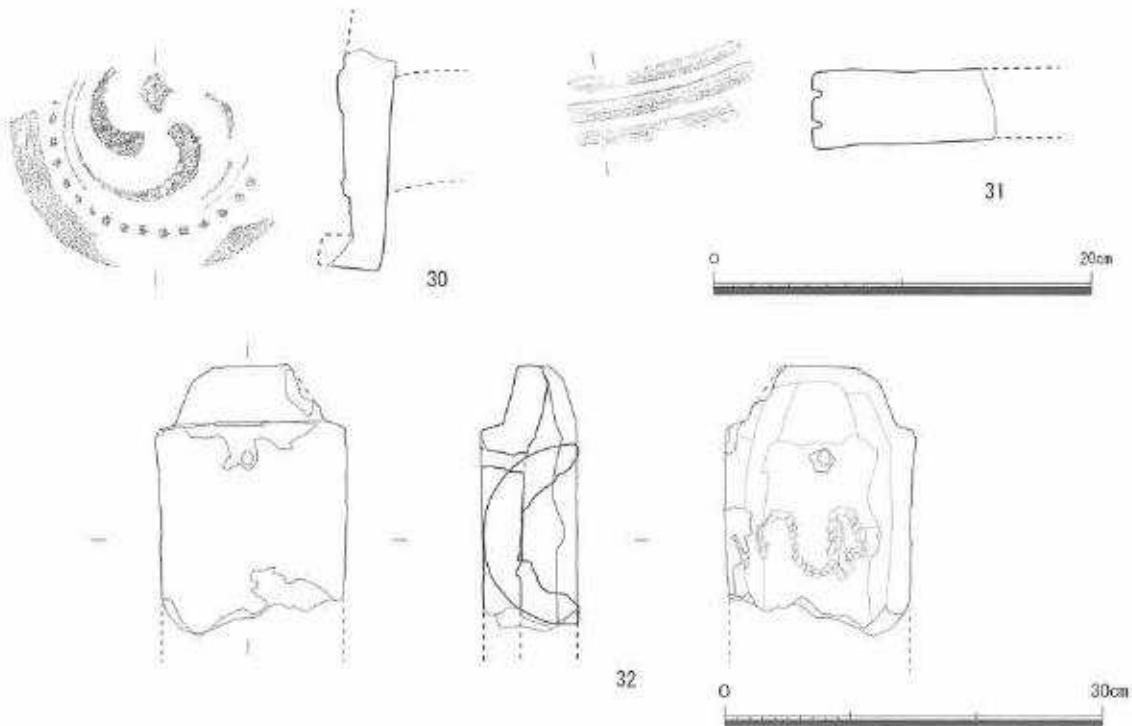


図13 2トレンチSK01出土遺物実測図 (1/4・1/6)

出土遺物 30～32は2トレンチSK01からの出土である。30は右巻の三頭巴文で内圈線がある。瓦当径は15.7cm(復元)で、色調は2.5Y7/1灰白色である。31は三重弧文軒平瓦で、瓦当厚4.0cm、弧縁幅は上1.0cm、中1.2cm、下1.2cmと上段が薄くなっている。凹面は糸切痕、布目痕があり瓦当面に沿ってナデが施される。凸面はナデ調整である。32は、胴部幅15.2cm、胴部高7.6cm、胴部厚3.4cmの玉縁丸瓦で玉縁長は4.5cmある。胴部上部に釘穴が穿たれており、凸面は縄タタキのちナデ、凹面には糸切痕、細目の布目痕、吊紐痕が残っており、吊紐Bであることから、室町前期のものであろう。色調は5B5/1青灰色である。

4まとめ

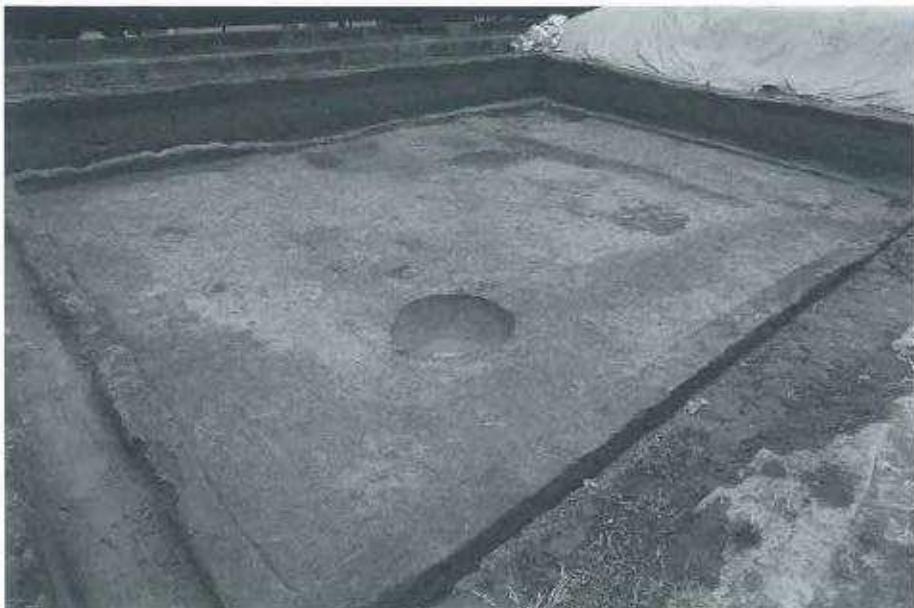
今回の調査では、舟戸神社周辺での遺構の残存状況、近代における神社への通路の整備の様子、神社境内地と神社西側の畠の旧地形が明らかとなった。

調査前に参道、門等の遺構があるのではないかと想定した舟戸神社への通路は、近代に造られたものであることが判明した。しかし、その下層では地山の高まりとそれに沿う形で東西方向に延びる溝が検出でき、参道に伴う溝とも考えられ、古代から参道として利用されていた可能性も考えられる。

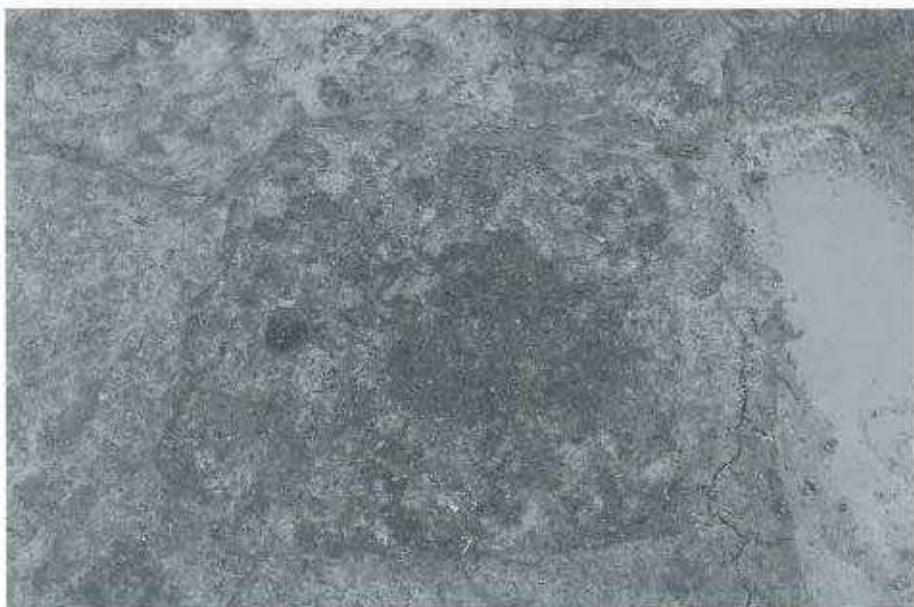
境内西端の3トレンチでは舟戸神社境内が地山から約1.2mの造成で整備されていること、境内の西側の2トレンチでは、1、3トレンチで堆積する地山の上層部分が削平されている状況を確認した。その地山上には中世の遺構が存在することから、早い時期に削平されたと考えられる。第4次発掘調査では、検出した建物基壇の断ち割り調査を行った結果、4.0～10.0cmの薄層を積み上げた版築を確認しており、この版築には今回の調査で確認した地山が使用されている。塔跡、金堂跡（推定）基壇面は、44.4mと周辺よりも高い位置で検出されていることから西安寺の建物基壇の構築にはかなりの土量を要したと考えられる。舟戸神社西側の地山が削られている状況は、西安寺の造営過程の一端を示すものだろう。

今後も中心伽藍、周辺での調査を進め、西安寺跡の保存・活用を図っていきたい。





遺構面 2 檢出遺構
(南東から)



遺構面 2 柱穴 1
(南から)



遺構面 2 柱穴 2
(南から)



遺構面2 検出遺構
(南から)



東壁土層断面 (南西から)



調査状況 (北西から)
後方舟戸神社



1

2



4



3



5



6



7



8



調査前（北から）



1トレンチ 調査前
(西から)



1トレンチ 遺構面1
検出遺構（東から）



1 トレンチ 遺構面 1
SX01 石列検出状況
(東から)



1 トレンチ 遺構面 2
検出遺構 (南東から)



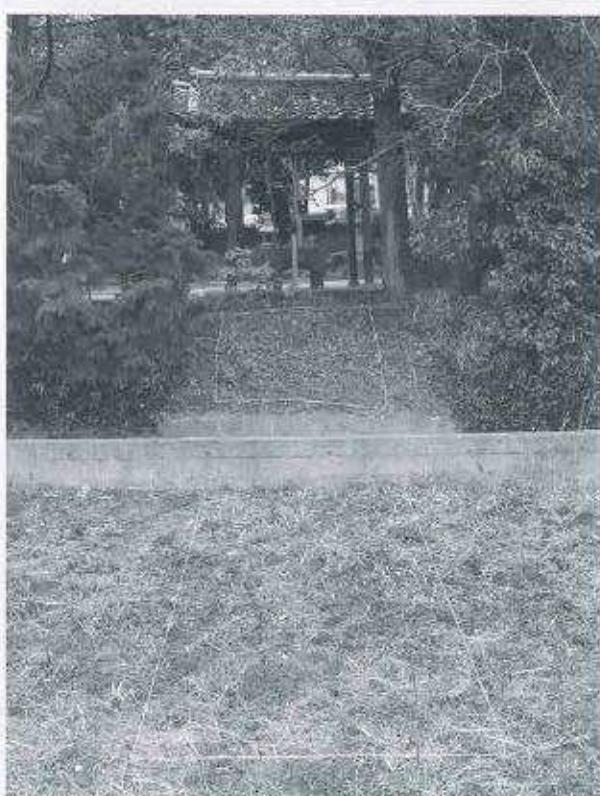
1 トレンチ 遺構面 3
検出遺構 (東から)



1 レンチ 東壁土眉断面
(北西から)



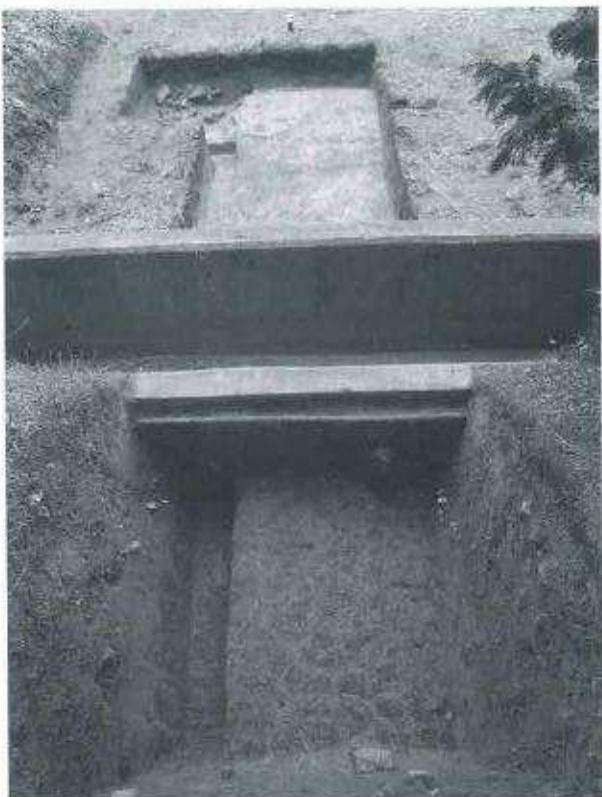
1 レンチ 遺構面3 SD04 (東から)



2・3 レンチ 調査前 (西から)



2 レンチ 繰出遺構
(北西から)



2・3 トレンチ 地山上検出遺構（東から）



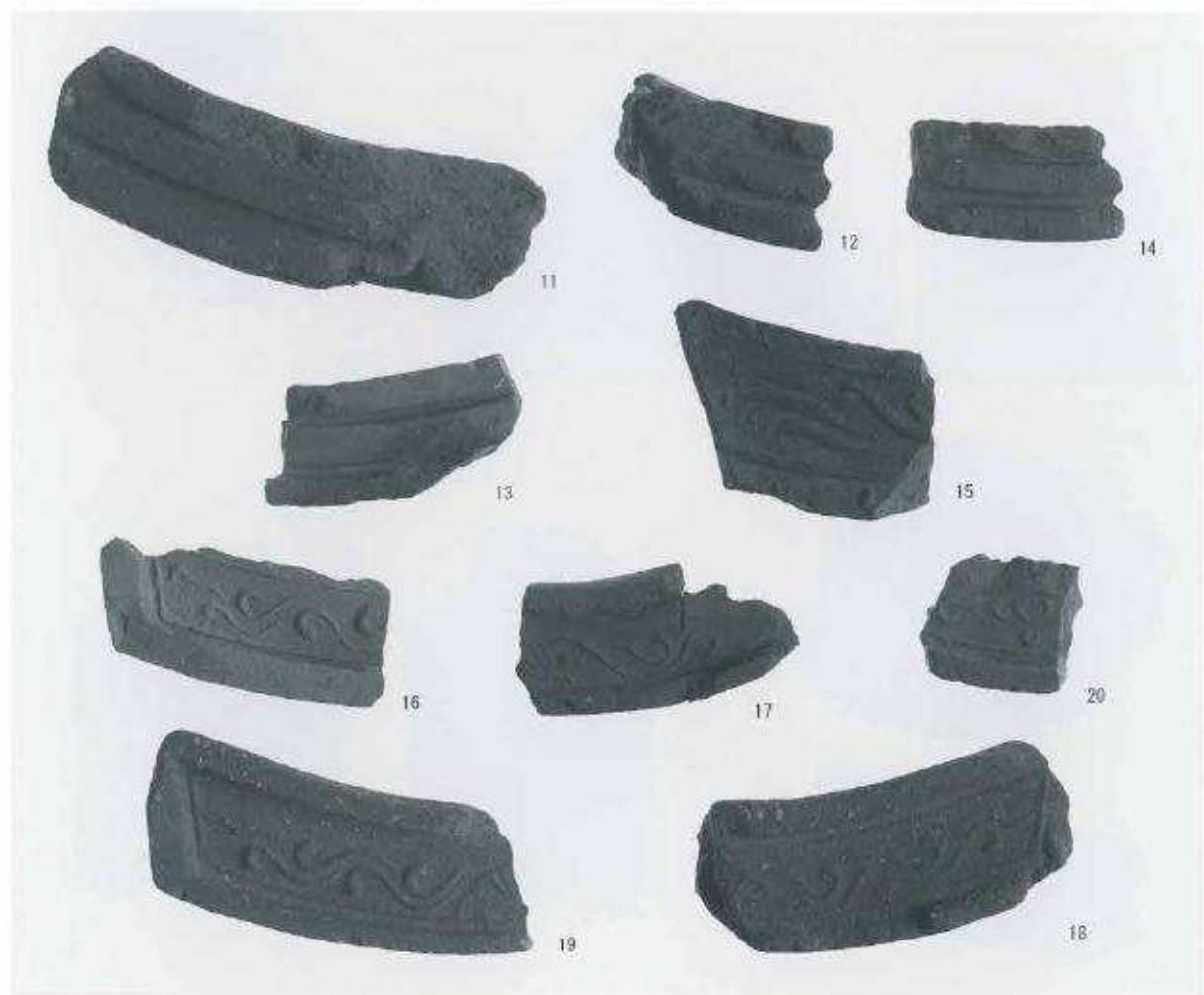
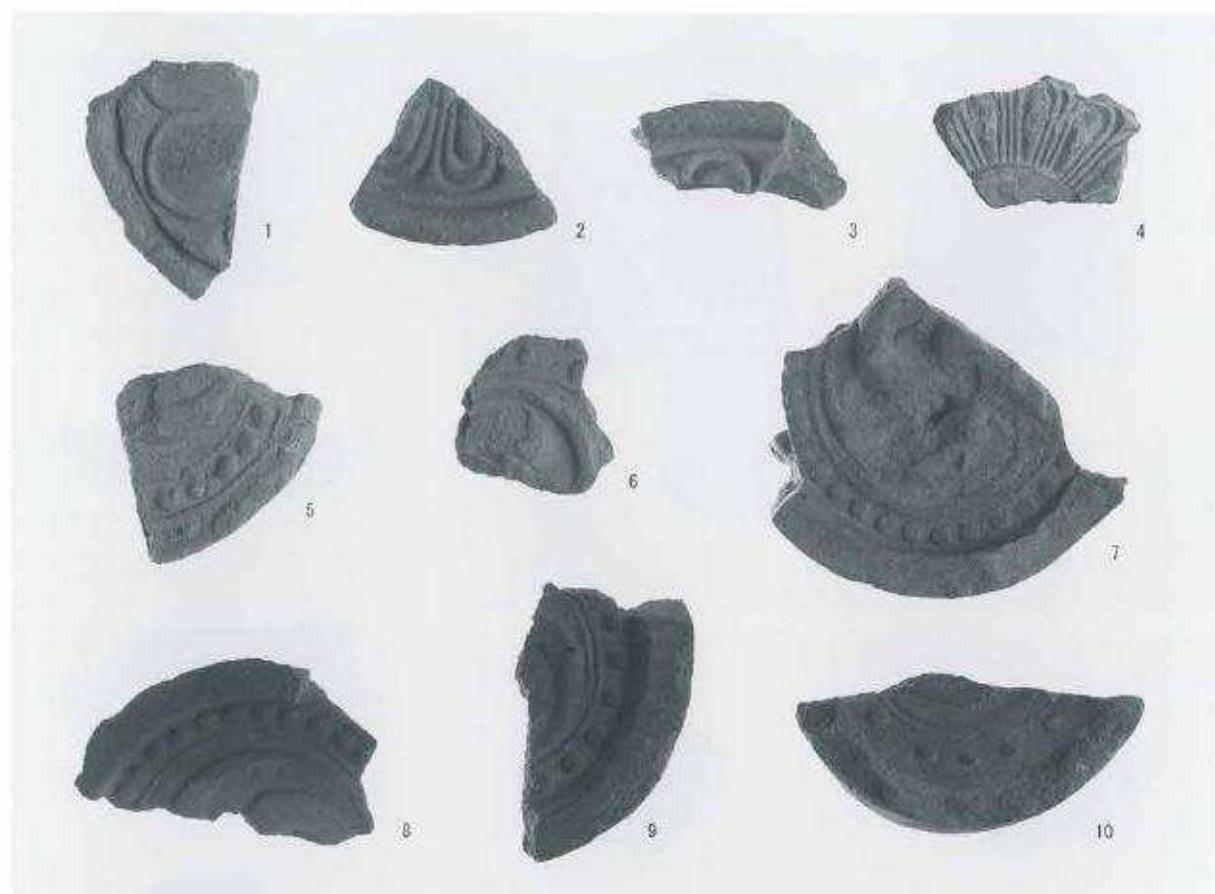
3 トレンチ 土層断面（西から）

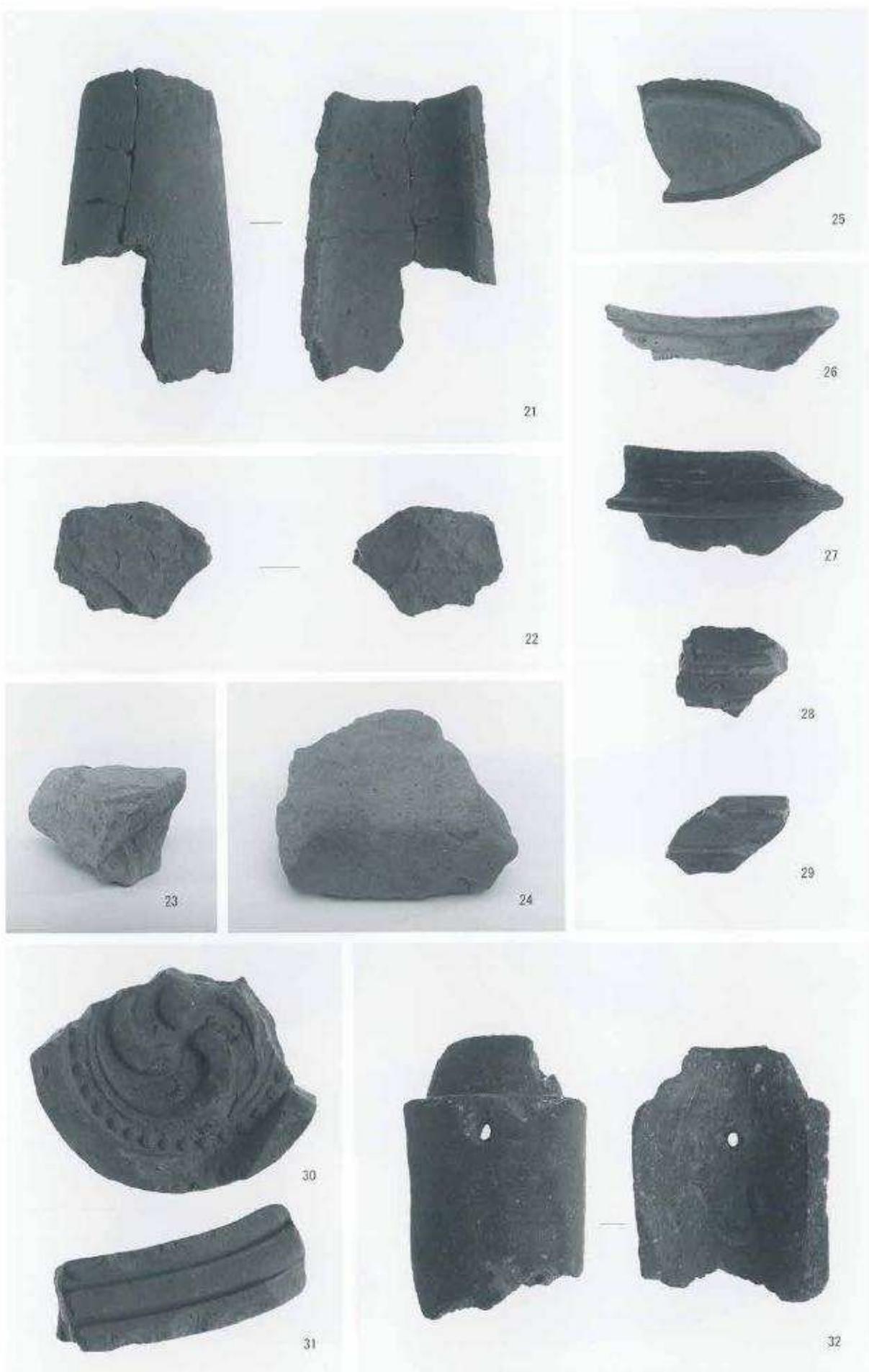


2 トレンチ SK01
(北東から)



3 トレンチ SK03
(東から)





報告書抄録

| ふりがな | さいあんじあとだいさじ・だい6じはくつちょうさほうこくしょ | | | | | | | |
|---------------|--------------------------------|-------|-------|-------------------|-----------------------------|---------------|-------|--------------|
| 書名 | 西安寺跡第5次・第6次発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 王寺町文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第13集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 櫻井恵 | | | | | | | |
| 編集機関 | 王寺町教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒636-0002 奈良県北葛城郡王寺町舟戸2丁目1番18号 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 平成30(西暦2018)年3月25日 | | | | | | | |
| 収録遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村番号 | 遺跡番号 | | | | | |
| 西安寺跡 (第5次) | 奈良県北葛城郡 王寺町舟戸2丁目 | 29425 | 1081 | 34° 35' 36" | 135° 42' 45" | 2016.6.20～7.4 | 56.06 | 個人住宅 建設工事 |
| 西安寺跡 (第6次) | 奈良県北葛城郡 王寺町舟戸2丁目 | 29425 | 1081 | 34° 35' 35" | 135° 42' 45" | 2017.3.6～3.25 | 30.06 | 範囲確認 |
| 収録遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 西安寺跡 (第5次) | 寺院 | 古代～中世 | 掘立柱柱穴 | | 土師器、須恵器、瓦器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、空瓦 | | | |
| 西安寺跡 (第6次) | 寺院 | 古代～近代 | 溝・土坑 | | 土師器、須恵器、瓦器、陶器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、空瓦 | | | |

西安寺跡第5次・第6次発掘調査報告書

王寺町文化財調査報告書 第13集

2018年3月25日

編集 王寺町教育委員会
発行 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番18号

印刷 株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地